長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆「蓬生」「手習」
玄陳筆「関屋」

長谷川　端（文責）　駒田貴子
村井俊司

解　題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』[1]各一冊の中の岡本主水筆「蓬生」「手習」、玄陳筆「関屋」である。

「蓬生」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央右寄りに円形を描いた下絵に、「よもぎふ」と墨書きする。全丁数は三十一丁、墨付二十八丁、遊紙前一丁、後二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は七～二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「関屋」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、草木を描いた下絵に、「せき屋」と墨書きする。全丁数は八丁、墨付五丁、遊紙前一丁、後二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は五～二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「手習」は綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀で山里の景を描き、下部には金で草木、銀で籬を配する下絵に、「てならひ」と墨書きする。全丁数は六十九丁、墨付六十七丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下

げで記し、そのまま本文を続けている。字数は二〜二十三字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」[2]、玄陳筆「帚木」[3]、玄的筆「空蟬」[4]、岡本主水筆「夕顔」[5]「若紫」[6]「賢木」[7]「明石」[8]「澪標」[9]「橋姫」[10]、石井了倶筆「末摘花」[11]、西山宗因筆「紅葉賀」[12]「宿木」[13]、左馬助筆「花宴」[14]、東寺観智院筆「葵」[15]、北左平次行生筆「花散里」[16]、大鳥居信岩筆「須磨」[17]は、既に解題を付し翻刻した。

二、岡本主水の書写と本文のミセケチ・補入等

「蓬生」「手習」の書写者、岡本主水の伝記については、「夕顔」[18]を翻刻した際に触れたので省略するが、ミセケチ、補入等に着目して、ここに翻刻した「蓬生」「関屋」「手習」の三巻におけるその数を調べると次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「澪標」に「宿木」「橋姫」を加えた表も掲げた。

巻	蓬生	関屋	手習
書写者	岡本主水	玄陳	岡本主水
ミセケチ	71	4	120
補入	28	5	64
傍書	5	2	11
合点	6	2	18
朱点	14	6	143
総計	124	17	356

巻	桐壺	帚木	空蟬	夕顔	若紫	末摘花	紅葉賀	花宴	葵
書写者	昌琢	玄陳	玄的	岡本主水	岡本主水	了倶	宗因	左馬助	観智院
ミセケチ	2	0	0	76	70	2	48	7	4
補入	7	0	1	48	49	0	29	3	4
傍書	0	2	0	2	10	1	4	1	8
合点	1	0	0	14	14	0	7	10	3
朱点	47	0	0	113	150	0	28	2	0
総計	57	2	1	253	293	3	116	23	19

巻	賢木	花散里	須磨	明石	澪標	橋姫	宿木
書写者	岡本主水	行生	信岩	岡本主水	岡本主水	岡本主水	宗因
ミセケチ	94	2	34	79	55	101	22
補入	55	2	33	40	17	25	19
傍書	6	1	11	9	6	17	12
合点	21	1	55	25	5	10	0
朱点	59	4	84	99	64	49	0
総計	235	10	217	252	147	202	53

今回翻刻した「蓬生」「関屋」「手習」の三巻について見ると、主水が書写した「蓬生」「手習」は、「夕顔」「若紫」などと同じく、ミセケチ、朱点等が非常に多いとわかる。

また、玄陳は以前に翻刻した「帚木」も書写しているが、表でわかるように、「帚木」は、総計が二つと極端に少なかった。「帚木」に比べれば遙に分量が少ない「関屋」の十七という総数は、多いといえる。

そして、今回翻刻した三巻には、「須磨」「明石」など最終丁にあった「一更」という記載はない。

これらミセケチ、朱点等についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、「若紫」の解題で述べた岡本主水の書写した巻は校正がなされ、ミセケチ等が多いという事実をここでも確認し、留意しておきたい。

三、玄陳筆「関屋」本文―写本との関係

玄陳筆「関屋」は、定家様の美麗な書写がなされている。玄陳の伝記については、「帚木」[19]を翻刻した際に触れたので、ここでは、本文について考えてみたい。この『源氏物語』揃の本文については、以前、西山宗因筆「紅葉賀」の「解題」で、本書と三条西実隆、紹巴ゆかりの四本とを対校して、その関係を考えた。そのため「関屋」でも四本との対校を行ないたい。

今回は、最初に『源氏物語大成』[20]で、本書と諸本との関係や特徴を確認し、次いで、四本との対校を行ないたい。そして最後に、本書より後の成立となる江戸時代の版本との異同を調べ、本書を『源氏物語』本文の流れの中に位置づけたいと思う。

『大成』は、周知のように青表紙本、河内本、別本の三つに分類している。そこで先ず確認しておきたいのが、本書が青表紙本であるという点である。この「関屋」に於いて、青表紙本と河内本の違いが如実にわかるのが、巻末である。

青表紙本→あいなのさかしらやなとそはへるめる
河内本　→あめる

本書は「あいなのさかしらやなとそはへるめる」で、青表紙諸本と一致する。また、『大成』には大島本と、全ての河内本との違いが見られる箇所として、四十五の部分が掲げられている。この中で本書と一致するのは、「心（大島本）」が「御心（河内本・本書）」となっている一箇所のみである。この点からも本書は河内本の流れではないとわかる。後に触れるのでここに記しておくが、この箇所は青表紙本の肖柏本、三条西本でも本書と同様「御心」となっている。

そして、次に掲げるのは、本書と河内本としてよく知られる尾州家本[21]と中京大本（『大成』では大島本）、『大成』に採択されていない飯島本[22]の異同を調べた表である。項目の「漢字仮名」は、漢字で書いてあるか、ひらがなで書いてあるかの相違の数である。「送り仮名」は送り仮名の表記の相違の数であり、「表記」は音便、「ゝ」「〳〵」などの相違の数である。この四項目に該当しない相違を「その他の相違」とした。

	尾州家本	中京大本	飯島本
漢字仮名	81	70	100
送り仮名	7	3	10
表記	43	35	29
その他の相違	71	75	82
総計	202	183	221

後に青表紙本の同様の調査表を掲げるが、それと比べると相違数が多い。それはいうまでもなく本書が、青表紙本に属するからである。

その青表紙本で『大成』が「関屋」の校異に採択している本は、六本ある。六本の中で、肖柏本、三条西の二本が、前掲のように本書と同じく「御心」となっていた。これは一応、本書が肖柏本、三条西本に近い証左であ

るといえる。この二本と本書が近いという点を含めて、次に青表紙の諸本と本書との関係を考えてみたい。

『大成』に青表紙本の相違箇所として取り上げられ、本書も該当する部分を抜き出すと、次のようになっている。本書と同じ本には「○」を付した。

大島本	本書	三条西本	肖柏本	横山本	榊原本	池田本
いさゝかかの	→いさゝかの	○	○	○	○	○
給ふへし	→給(ふ)○へし		○			
せき山	→せき	○	○	○		
すくし	→すこし	○				
くつれいてたる	→はつれいてたる	○		○	○	○
いま	→ナシ	○				
まいりてそ	→まいれり一日	○	○	○	○	○
心	→御心	○	○			
ゐたりつる	→ゐたり一日	○	○	○	○	○
かはちのかみ	→かうちのかみ		○	○	○	○
をきし	→をきしを	○	○			
すくし	→すこし	○				
総計		10	8	6	5	5

この表からも、三条西本と肖柏本と共通する箇所が多く、本書に近いといえる。このように、『大成』によって本書の系統を確認すると、青表紙本で三条西本と肖柏本に近い本文であるといえる。

三条西本は三条西実隆が書写した本であり、その実隆は肖柏から『源氏物語』の講釈を受けており[23]、二本が近いのも首肯できる。そして、その流れに本書は繋がるといえる。

ところで、この三条西実隆の書写に関係する本と本書について取り上げたのが、先に記した「紅葉賀」の解題で対校した四本である。この中の一つが、今見てきた『大成』に三条西本とある本で、現在は日本大学蔵のため、先の解題では日大本[24]とした。

以下、この三条西本（日大本）を含め、先の「紅葉賀」と同様に、本書との異同を調べたのが次の表である。今回は、『大成』が底本として採用している大島本[25]、『大成』に採られていない青表紙本で、三条西本とは系統が違う正徹本[26]と、別本で「関屋」は青表紙本だが、巻によっては河内本も交じる伏見天皇本[27]を参考として掲げておいた。また、蓬左文庫にはもう一本、紹巴奥書の青表紙本があり蓬左本[28]②として、それも加えた。

	三条西本	鶴見大本	蓬左本	蓬左本②	書陵部本	大島本	正徹本	伏見本
漢字仮名	85	52	77	80	66	76	92	88
清濁	○	○	○	1	○	2	○	○
朱点	6	○	○	○	○	105	○	○
送り仮名	2	3	2	5	5	11	3	16
表記	35	26	32	23	12	13	15	38
その他の相違	6	4	6	7	11	8	21	22
総計	134	85	117	116	94	215	131	164

この表は、本書との相違を示した数字であり、数が少ない本ほど、本書と近似しているといえる。濁点、朱点を全く付さない本もあり、その点を勘案する必要があるが、総計の部分を見れば明白なように、本書に近い本文を有するのは、鶴見大本[29]、書陵部本[30]、蓬左本[31]、蓬左本②の順である。鶴見大本が本書と最も近いという結果は、先の「紅葉賀」と同様である。

その理由としては、「紅葉賀」の解題でも述べたが、本書の書写者が玄陳であるように、この『源氏物語』揃は、紹巴の子孫が書写の中心になっている。そのため書写の際には、紹巴に関係する『源氏物語』の本文が使用されていたと考えられる。鶴見大本は、「天正十四年丙戌年」「紹巴講釈本」と記された奥書きを有する寛永頃の書写とされる本であり、里村家に関係の深い本であるためだといえる。

その紹巴は三条西公条から『源氏物語』の講釈を受けており、三条西家の『源氏物語』に遡るのも容易である。三条西本（日大本）、蓬左本、書陵部本は、何れも三条西実隆ゆかりの本であり、紹巴と三条西家との繋がりを考慮すれば、「紹巴講釈本」と言われる鶴見大本や本書が、実隆ゆかりの三条西家の本に類似し、その流れに位置づけられるのも自然な帰結と考えられる。

四、江戸期の版本との関係

青表紙本の本書に至る系譜については前に触れて来たが、ここでは、本書より時代が下る江戸時代の版本の本文と、本書との関係を見てみたい。『源氏物語』の近世の版本については、池田利夫氏[32]、清水婦久子氏[33]に指摘がある。清水氏の指摘を基に列記すれば、次のようになる。

一　慶長中期頃刊、古活字版（伝嵯峨本）
二　元和九年（一六二三）刊、古活字版
三　寛永（一六二四～一六四四）頃刊、無跋無刊記整版本　◎→無刊記本

四　慶安三年（一六五〇）山本春正跋、絵入り。[34]　◎→承応本
五　万治三年（一六六〇）刊、絵入り（横本[35]）
六　無刊記小本、絵入り　◎→絵入小本
七　承応元年（一六五二）松永貞徳跋、版本『万水一露』[36]　◎→万水
八　寛文十三年（一六七三）刊『首書源氏物語』[37]　◎→首書
九　延宝元年（一六七三）北村季吟跋『湖月抄』　◎→湖月抄

この中の◎を付した版本と本書とを対校し、異同の数を示したのが次の表である。その際、四は一般に「承応本」と呼ばれるため、その呼称を用い、六は「絵入小本」とした。

	無刊記本	承応本	絵入小本	万水	首書	湖月抄
漢字仮名	107	108	92	126	105	118
清濁	○	177	173	○	187	171
送り仮名	6	7	7	3	6	4
表記	30	31	30	25	22	29
その他の相違	6	10	11	10	8	7
総計	149	333	313	164	328	329

無刊記本、『万水』は、濁点を付さないために数が少なくなっているが、この清濁を含め、漢字ひらがなの違い等の表記の相違は、本文の内容に及ぶ異同ではなく、これを除外して、項目の「その他の相違」に入れた、

「こきみ」（本書）→「こきみいまは」（承応本）

というような用例に注目すれば、無刊記本との相違が六と最も少ないのである。更に、本書との関係を容易に識別できる部分として、「せき」とするか「せき山」とするかという箇所がある。ここまで本書との対校に用いた全ての本に『源氏物語別本集成』[38]『源氏物語別本集成続』[39]の諸本を加え掲げれば、

○せき　本書・大島本・三条西本・鶴見大本・蓬左本・蓬左本②・国冬本・肖柏本・伏見天皇本・保坂本・無刊記本

○せき山　書陵部本・正徹本・陽明本・池田本・御物本・前田本・天理河内本・穂久邇文庫本・高松宮本・麦生本・阿里莫本・源氏物語絵巻詞書・承応本・絵入小本・首書・湖月抄

となっている。ここでも無刊記本は、版本として唯一、本書と同じく「せき」となっている。この点から無刊記本が本書に近いと考えられるが、「その他の相違」の数は、最も少ない無刊記本の六から十一の範囲であり、その幅は大きくないといえる。その理由としては、全て青表紙本であり、清水氏[40]が、

これら整版本の本文に、二通りの流れが見られることである。一つは慶安本「絵入源氏」の流れで、これが後の流布本になってゆく。もう一つは無跋無刊記本の流れで、これは『万水一露』の本文として採用され、『万水一露』を通じて『首書源氏』『湖月抄』ともに校訂に使用されるが、後の流布本にはならなかった。このうち流布本の源流とも言うべき、慶安本「絵入源氏」の親本の一つは、伝嵯峨本と思われる。

という指摘でわかるように、その繋がりも認められるからだといえる。また同氏には「『絵入源氏』桐壺巻の本文は、三条西家本にもっとも近く、次いで肖柏本が近いということがわかる。」という指摘もある。この三条西家本、肖柏本に近いという結果は先に触れたが、本書にもあてはまる。つまり、本書も『絵入源氏』等の版本も三条西家の証本を継承しているのである。ここまで見てきた本書と版本との対校によって、三条西家の証本から、

江戸期の版本へという流れの中での本書の位置が、明らかになるといえる。

五、結語

『醒睡笑』の著者として知られる安楽庵策伝に、『策伝和尚送答控』[41]という書がある。策伝の自筆で、一部を除き、和歌一首の上句を一行、下句と作者を一行に記すという形式で綴られている。その内容については、中村幸彦氏[42]に、

時折の詠、主として諸知己と送答の和歌狂歌、時に漢詩俳諧を記し止めたもので、時には草案の控、時には即答の後の筆記、書簡つきのものは、そのまま写してある。又記憶すべき諸事を記しとどめた所も若干ある。

という解説がある。この『策伝和尚送答控』の中に、

玄陳法橋

おもひやる心の色のふかきをもうす紅葉とや人の見るらん　伝

返し

心ありてたをれる枝の紅葉々はほかにさきたつ色とこそみれ　玄陳

という、策伝と玄陳の贈答歌がある。この贈答歌の背景について、鈴木棠三氏[43]は、

家集に錦上花を添えようとして、（中略）昌琢・玄仲・昌倪・玄陳・玄的・宗順といった連歌師たちも動員されることになる。この人びとは、いずれも返歌をもとめるために策伝の方から詠みかけたとみられるようである。

と指摘する。ここでいう「家集」は『策伝和尚送答控』を指し、「錦上花を添え」とは、同氏が「当時の連歌師の社会的位置は、のちの俳諧師などとは比較できぬ程高かったし、連歌は文芸の表芸というべき評価をえていた」という連歌師の高い地位が前提となる。

この玄陳ら『策伝和尚送答控』に名前を連ねている人々については、中村氏に、

この送答の行われた寛永十年前後を各方面で代表する人々を網羅しているとさえ思われる。それらの人々の動向や、この風雅と戯笑の送答の中に感得出来る寛永文化のいぶき

という見解もあり、この点からも「関屋」の書写者である玄陳は、寛永文化を担う重要な人物の一人であったといえる。

この『源氏物語』揃は、連歌師として『策伝和尚送答控』に名前が見える昌琢・玄仲・昌倪・玄陳・玄的・宗順が書写者の有力な構成員であった。そして、これら連歌師による書写は、宗祇以来の伝統である。言い換えれば、この『源氏物語』揃の書写は伝統的な形式を踏襲してなされたのである。そして書写された本文は、三条西家の証本の流れを汲む、当時としては、最も優良な本文であり、『源氏物語』諸本系譜の中では、中世の三条西家等の写本から、近世の『絵入　源氏物語』や北村季吟の『源氏物語湖月抄』等の版本への過渡期に位置する本であり、中世から江戸初期の『源氏物語』本文や源氏学を考える上で看過できない写本という位置づけが出来るのである。

翻刻凡例

一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
一、和歌は改行をし、二字下げとした。
一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
一、本文の傍書は原本通りとした。
一、補入記号がある場合は該当箇所に「○」を付し、補入文字は右に記した。
一、漢字の踊字「〳〵」は、そのままとした。
一、本文の朱点は「・」で示した。
一、朱合点は、傍線で示した。
一、「手習」に錯簡がある。「須磨」39オ～84オは「手習」の本文であり、「手習」39オ～67ウが「須磨」の本文である。「手習」38ウの次に「須磨」39オ～84オにある「手習」の本文を置き、正しい本文として翻刻した。

（よもきふ）

もしほたれつゝわひ給しころほひ都にも
さま〳〵おほしなけく人おほかりしをさ
てもわか御身のより所あるはひとかたの
思ひこそくるしけなりしか二条のうへな
とものとやかにて旅の御すみかをもおほ
つかなからすきこえかよひ給つゝくらゐをさ
り給へるかりの御よそひをもたけのこの
よのうきふしをとき〳〵につ〳〵けてあつか
ひきこえ給になくさめ給けんなか〳〵其か
すとも人にしられす立別給ひしほとの御

1オ

ありさまをもよそのことに思ひやり給人々
のしたの心くたき給（た）くひおほかり・ひたち
の宮の君はちゝみこのうせ給にしなこりに
又思ひあつかふ人もなき御身にていみし
う心ほそうなりしを思ひかけぬ御ことの
いてきてとふらひきこえ給事たえさり
しをいかめしき御いきほひにこそことに
もあらすはかなきほとの御なさけはかりと
おほしたりしほとまちうけたまふたもと
のせはきにはおほそらのほしのひかりをたら

1ウ

いの水にうつしたるこゝ（こ）ちしてすくし給ひ
しほとにかゝるよのさはき出きてなへての
世うくおほしみたれしまきれにわさとふかゝ
らぬかたの心さしはうち忘たるやうにてと
をくおはしましにしのちふりはへてしもえ
たつねきこえ給はすその名こりにしはし（は）
なく〳〵もすくし給しを年月ふるまゝに
あはれにさひしき御ありさまなりふる
き女はらなとはいてやいとくちをしき御
すくせなりけりおほえす神仏のあら

2オ

はれ給へらんやうなりし御心はえにかゝるよ
すかも人は〇おはするものなりけりとあり
かたうみたてまつりしをおほかたよのこと
といひなから又たのむかたなき御ありさま
こそかなしけれとつふやきなけくさるかた
にありつきたりしあなたのとしころは
いふかたなきさひしさにめなれてすくし
給しをなか〳〵すこしよつきてならひにける
年月にいとたへかたく思ひなけくへしと
こしもさてありぬへき人々はをのつからま

2ウ

いりつきてありしをみなつき〳〵にしたかひ
ていきちりぬ女はらのいのちた小ぬも有
て月日にしたかひて上下の人かすゝくな
くなりゆくもとよりあれたりし宮の
うちいとゝきつねのすみかになりてう
とましうけとをきこたちにふくろうのこ
ゑを朝夕にみゝならしつゝ人けにこそさやう

のものもせゝれてかけかくしけれこたまな
とけしからぬものともところをえてやう〳〵
かたちをあらはし物わひしきことのみかす

3オ

しらぬにまれ〳〵のこりさふらふ人はなをい
とわりなしこの比すりやうなとのおもし
ろき家つくりこのむかこの宮のこたちを
心につけてはなちたまはせてんやとほ
とりにつきてあむなひまさするをさ
やうにせさせ給ていとかうものをそろし
からぬ御すまひにおほしうつろはなんたち
とまりさふらふ人もいとたへかたしなと
きこゆれはあないみしや人のきゝ思はん
こともありいけるよにしかなこりなきわさ

3ウ

はいかゝせんかくおそろしけにあれはてぬれ
とおやの御かけとまりたる心ちするふ
かきすみかと思ふになくさみてこそあれと

うちなきつゝおほしもかけす御てうとゝもゝ
いとこたいになれたるかむかしやうにてうる
はしきをなまものゝゆへしらむと思へる
人さるものえうしてわさとその人かの人に
せさせ給へるとたつねきゝてあんないするも
をのつからかゝるまつしきあたりと思ひあな
つりていひくるをれいの女はらいかゝはせん

そこそはよのつねの事とてとりまきら
はしつゝ目にちかきけふあすのみくるしさを
つくろはんとする時もあるをいみしういさ
め給て見よと思ひ給てこそしをかせ給
ひけめなとてかかる〳〵しき人の家のか
さりとはなさんなき人の御ほいたかはん
かあはれなることゝの給てさるわさはせさ
せ給はすはかなき事にてもとふらひきこ
ゆる人はなき御身なりたゝ御せうとのせん
しのきみはかりそまれ〳〵に〇京に出給とき

4オ

はさしのそき給へとなれ(そ)も世になきふる
めき人にておなしきほうしといふなかにも
たつきなくこの世をはなれたるひしりに
ものしたまひてしけき草よもきをたに
かきはらはん物とも思ひより給はす・かゝる
まゝにあさちは庭のおももみえすしけり
よもきは軒をあらそひておひのほりむく
らは西ひんかしのみかとをとちこめたるそ
たのもしけれとくつれかちなるめくり
のかきを馬牛なとのふみならしたる道にて

春夏のなれははなちかふあけまきの
心さへそめさましき八月野分あらかりし
としらうとももたうれふししものや〇(ともイ)のはか
なきいたふきなりしなとはほねのみわつ
かに残りて立とまるけすたになしけふり
たえてあわれにいみしき事おほかりぬす人

4ウ

5オ

なといふひたふるこゝろあるものも思ひやり
のさひしけれはにやこの宮をはふようの物
にふみすきてよりこさりけれは〇かくいみし
きのらやふなれとも〇さすかにしんてんのうち

5ウ

はかりはありし御しつ〇ひかはらすつやゝかに
かひはきなとする人もなしちりはつもれとも
まきるゝことなきうるはしき御すまひにも
あかしくらし給ふ・はかなきふるうた物かた
りなとやうのすさひことにてこそつれ
つれをも思ひなくさむるわさなめれさやう
のことにも御心をそく物し給わさとこのまし
かしねとをのつから又いそくことなき程は
おなし心なる文かよはしなともうちして
こそわかき人は木草につけても心を

6オ

なくさめ給へけれとおやのもてかしつき
給し御心おきてのまゝによの中をつゝまし
きものにおほしてまれにもことかよひ給へ
き御あたりをもさらになれたまはす・ふり
にたるみつしあけてかしもりはこやのとし
かくやひめの物かたりのゑにかきたるをそ
時々まさりものにし給〇ふるうたとてもお
かしきやうにえりいてたいをもよみ人
をもあらはし心えたるこそ見ところ〇あり
けれうるはしきかんやかしみちのくにかみ

6ウ

なとのふくためるにふる事ともめな
れたるなとはいと〇さましけなるをせめて
なかめ給おり〳〵はひきひろけ給いまの世の
人のすめる経うちよみをこなひなといふ
事はいとはつかしうし給て見奉る人もな
けれとすゝなととりよせ給はすかやうに
うるはしくそものし給ける・侍従なといひ
し御めのとこのみこそとしころあくかれい
てぬものにてさふらひつれとかよひまい

りしさい院うせ給なとしていとたへかた

7オ

く心ほそきにこの姫君の母北のかたのはら
から世にをちふれてすりやうの北のかた
になり給へる有けりむすめともかしつき
てよろしきわか人とも〇(も)むけにしらぬところよ
り半(は)おやとももまうてかよひしをと思ひ
てとき〳〵いきかよふこの姫君はかく人う
とき御くせなれはむつましくもいひかよひ
給はすをのれをはおとしめ給ておもてふせ
におほしたりしかは姫君の御ありさまの
心くるしけなるもえとふらひきこえすなと

7ウ

なまにくけなることはともいひきかせつゝと
き〳〵きこえけり・もとより有つきたる
さやうのなみ〳〵の人は中〳〵よき人のまね
に心をつくろひ思ひあかるもおほかるをや
むことなきすちなからもかうまておつへき

すくせありけれはにや心すこしなを〳〵し
き御(お)をはにそありける・わかかくおとりの
さまにてあなつらはしく思はれたりしをいか
てかかゝる世の末にこの君を我かむすめとも
のつかひ人になしてしかな心はせなとのふるひ

8オ

たるかたこそあれいとうしろやすきうしろ
みならむと思ひて時々こゝにわたらせ給て
御ことのねもうけたまはらまほしかる人なむ
侍ときこえけりこの侍従もつねにいひ
もよほせと人にいとむ心には〇(あらて)たゝこちたき
御ものつゝみなれはさもむつひ給はぬをねた
しとなん思ける・かゝるほとにかの家あるし
大弐になりぬなりぬむすめともあるへき
さまにみをきてくたりなんとすこの君を
なをもいさなはんの心ふかくてはるかにかく

8ウ

まかりなんとするに心ほそき御ありさま

のつねにしもとふらひきこえねとちかきた
のみ侍つるほとこそあれいと哀にうしろ
めたくなんなとことよかるをさらにうけひ
き給はねはあなにくこと〳〵しや心ひとつに
おほしあかるともさるやふはらにとしへ給
へる人を大将殿もやんことなくしも思き
こえ給はしなとえんしうけひけりさるほと
にけに世中にゆるされ給て宮こに帰り
給とあめのしたのよろこひにてたちさはく

9オ

我もいかて人よりさきにふかき心さしを御
らんせられんとのみ思ひきほふおとこ女に
つけてたかきをもくたれるをも人の心は
へを見たまふにあはれに〇しる事さま〳〵な
りかやうにあはたゝしき程にさらに思ひい
て給ふけしきみえて月日へぬいまは〇きり
なりけり年比あらぬさまなる御ありさま
をかなしういみしきことを思ひなからももえ

出る春にあひ給はなんとねんしわたり
つれとたひしかはらなとまてよろこひ思ふ

9ウ

なる御くらゐあらたまりなとするをよそ
にのみきく中〇きなりけりかなしかりしおり
のうれはしさはたゝ我身ひとつのためになれ
るとおほえしかひなきよかなと心くたけてつ
らくかなしけれは人しれすねをのみなき給
ふ・大弐の北のかたされはよまさにかくたつ
きなく人わろき御ありさまをかすまへ給人
はありなんや仏ひしりもつみかろきをこ
そ道引よくし給なれかゝる御ありさまにて
たけくよをおほし宮うへなとの〇はせし

10オ

時のまゝにならひ給つる御心〇をこりのい
とをしき事といとゝおこかましけに思ひ
てなをおもほしたちねよのうきときはみ
えぬ山ちをこそ〇たつぬなれゐ中なとは

むつかしきものとおほしやるらめとひたふる
に人わろけにはよももてなしきこえしなと
いとことよくいへはむけにくつしにたる女
はらさもなひき給はなんたけき事もある
ましき御身をいかにおほしてかくたてたる
御心なら心ともときつふやく侍従もかの大

10ウ

弐のおひたつ人かたらひつきてとゝむへく
もあらさりけれは心よりほかに出たちて見た
てまつりをかんかいと心くるしきをとて
そゝのかしきこゆれとなをかくかけはなれ
てひさしうなり給ぬる人にたのみをかけ
給御心のうちにさりとも有へてもおほし
いつるついてあらしやは哀に心ふりき契を
し給しに我身のうくてかくわすられたる
にこそあれ風のつてにてもわかかくいみ
しき有さまをきゝつけ給はゝかならすと

11オ

むらひいて給てむとととしころおほしけれはお
ほかたの御いゑゐもありしよりけにあさ
ましけれとわか心もてはかなき御てう
とゝもなともとりうしなはせ給はす心つ
よくおなしさまにてねんしすくし給なり
けり程なきかちにいとゝおほししつみた
るにたゝ山人のあかきこのみひとつをか
ほにはなたぬとみえ給御そはめなとはおほ
ろけの人の見たてまつりゆるすへきに
もあらすかしくはしくはきこえしいとをしう

ものいひさかなきやうなり冬に成行ま
まにいとゝかきつかんかたなくかなしけに
なかめすくし給ふかの殿にはこ院の御れう
の御八講よの中ゆすりてし給ことに
そうなとはなへてのはめさすさえすかくれ
をこなひにしみたうときかきりをえらせ給
けれはこのせんしの君もまいり給へりけり

11ウ

かへりさまに立より給てしか〳〵権大納言
とのの御はつかうにまいり〇侍〇るなりいと
かしこういけるしやうとのかさりにをとらす

12オ

いかめしうおもしろきことゝものかきりをな
むし給へさる仏菩薩の変化の身に
こそ物し給めれいつゝのにこりふかき世に
なとてむまれ給ひけんといひてやかてい
て給ぬことすくなによの人にゝぬ御あはひ
にてかひなきよの物かたりをたにえきこ
えあはせ給はすさてもかはかりつたなき
身のありさまをあはれにおほつかなく
てすくし給は心その仏ほさつやとつらう
おほゆけにかきりなめりとやう〳〵思ひ

12ウ

なり給に大弐の北のかたにはかにきた〇り
れいはさしもむつひぬをさそひたてんの
心にてたてまつるへき御さうそくなとて
くしてよきくるまにのりておもゝちけ色
ほこりかに物思ひなけなるさましてゆく
りもなくはしりきて門あくるより人わろ
くさひしき事かきりもなしひたりみき
のともみなよろほひたうれにけれはをの
こともたすけてとかくあけさはくいつれ
かこのさひしきやとにもかならすわけたる

あとあなるみつの道とたとるわつかに
みなみおゆてのかうしあけたるまに
よせたれはいとゝはしたなしとおほした
れとあさましう〇けたる木丁さしいてゝ
しゝういて来りかたちなとおとろへに
けりとしころいたうつゐえたれとなを
ものきよけによしあるさましてかたしけ
なくともとりかへつへく見ゆいてたち
なんことを思ひなかし心くるしき御ありさま
のみすてたてまつりかたきをしゝう

13オ

のむかへになんまいり来(キタ)る心うくおほしへた
てゝ御身つからこそあからさまにもわたらせ給
はねこの人をたにゆるさせ給へとてなん
なとかうあはれけなるさまにはとてうち
もなくへきそかしされとゆく道に心をや
りていと心ちよけなり・こ宮おはせし時
をのれをはおもてふせなりとおほしすて
たりしかはうと〳〵しきやうになりそめに
しかと年ころもなにかはやむことなきさま
におほしあかり大将殿なとおはしましかよふ

13ウ

御すくせのほとをかたしけなく思給へられ
しかはなんむつひきこえさせんもはゝかる
事おほくてすくしはへりつるをよの中の
かくさためもなかりけれはかす〇(な)らぬは身は中〳〵
心やすく侍ものなりけりをよひなくみた
てまつりし御有さまのいとかなしく心

14オ

くるしきをちかきほとはをのつからおこたる
おりものとかにたのもしくなんはへりける
をかくはるかにまかりなんとすれはうしろめた
く哀におほえたまふなとかたらへと心と

けてもいらへ給はすいとうれしきことなれ
とよにゝぬさまにて何かはかうなからこそ
くちもうせめとなん思侍とのみの給へは
けにしかなむおほさるへけれといける
身を捨てかくむくつけきすまひする
たくひは侍らすやあらん大将殿のつくり
みかゐ(き)給はんにこそはひきかへたまのうて
なにもなりかへらめとはたのもしう〇(は)侍れ
とたゝ今は兵部卿の宮の御むすめより
ほかに心わけ給かたもなかなり昔よりすき

14ウ

すきしき御心にてなをさりにかよひ給
ける所〳〵みなおほしはなれにたなりまし

15オ

てかうものはかなきさまにてやふはらに
すくし給へる人をは心きよく我をたのみ
給へる有さまと尋きこえ給こといとかた
くなんあるへきなといひしらするをけに
とおほすもいとかなしくてつく〳〵とな
き給されとうこくへうもあらねは万にい
ひわつらひくらしてさらはしゝうをたにと
日のくるゝまゝにいそけは心あはたゝしく

てなく〳〵さらはまつけふはかうせめ給
をくりはかりにまうて侍らんかのきこえ
給もことはりなり又おほしわつらふもさる
事に侍れは中に見たまふるも心くるしく
なんとしのひてきこゆこの人さへうちす
てゝんとするをうらめしうも哀にもおほ
せといひとゝむへきかたもなくていとゝねを
のみたけき事にてものし給かたみにそ
へ給へき身なれころもゝしほなれたれは

15ウ

年経ぬるしるしみせ給へきものなくて

我御くしのおちたりけるをとりあつめ
てかつらにし給へるか九尺よはかりにてい
ときよらなるをおかしけなるはこにいれ
てむかしの人のえかうのいとかうはし
きひとつほくしてたまふ

たゆましきすちをたのみし玉かつら
思ひのほかにかけはなれぬるこまゝの
のたまひをきし事もありしかはかひな
きみなりとも見はてゝんとこそ思ひつれ
打捨らるゝもことはりなれとたれにみゆつ

つりてかとうらめしうなんとていみし
うない給この人も物もきこえやらすまゝ
のゆいこむはさらにもきこえさせすとし
比のしのひかたきよのうさをすくし侍り
つるにかくおほえぬみちにいさなはれて

16オ

16ウ

はるかにまかりあくかるゝことゝて
　玉かつらたえてもやまし行道も手向の
袖もかけてちかはん命こそしり侍らねな
といふにいつらくらふなりぬとつふやは
れて心も空にてひきいつれはかへりみ

のみなんせられける年比わひつゝもゆき
はなれさりつる人のかくわかれぬることを
いと心ほそうおほすによにもちゐる〇る
ましきおひ人さへいてや事はりそいかて
かたちとまり給はん我らもえこそねんしは
つましけれとをのかみゝにつけたるたより
とも思ひいてゝとまるましう思へるを人
わろくきゝおはすしもつきはかりになれは
雪あられかちにてほかにはきゆるまも有
を朝日夕日をふせくよもきむくらのかけに

17オ

ふかうつもりてこしのしら山思ひやらるゝ

17ウ

雪のうちに出いるしも人たになくてつれ
つれとなかめ給はゝなきことをきこえな
くさめなきみわらひみまきらはしつる人
さへなくてよるもちりかましきみ丁のう
ちもかたはらまひしく物かなしくおほさる・
かのとのにはめつらし人にいとゝ物さは
かしき御有さまにていとやむことなくお
ほされぬところ〳〵にはわさともえをと
つれたまはすましてその人はよにやをはす

らんとはかりおほしいつるおりもあれとた
つね給へき御心さしもいそかてありふ
るにとしかはりぬうつきはかりにはなちる
里を思ひいてきこえ給て忍てたい
のうへに御いとまきこえていて給日ころふ
りつるなこりの雨すこしそゝきておかし
きほとに月さし出たりむかしの御ありき
おほしいてられてえんなるほとのゆふつく

18オ

よにみちのほとよろつの事おほし出て
おはするにかたもなくあれたる家のこ

18ウ

たちしけくもりのやうなるをすき給
おほきなる松にふちのさきかゝりて月
影になよひたる風につきてさとにほふ
かなつかしくそこはかとなきかほりなり
たち花にはかはりてをかしけれはさしいて給へる
に柳もいたうしたりてついちもさはらねはみたれ
ふしたり見し心ちするこたちかなとおほすは
はやうこの宮なりけりいとあはれにてをし
とゝめさせ給れいのこれみつはかゝる御しのひあ
りきにをくれねはさふらひけりめしよせてこゝ

19オ

はひたちの宮そかしなしか侍りときこゆこゝ
にありし人はまたやなかむらんとふらふへきを
わさとものせんもところせしかくるついてに
いりてせうそこせよ能たつねよりてをう

ちいてよ人たかへしてはをこならんとの給ふこゝ
にはいとゝなかめまさるころにてつく〳〵とおかし
けるにひるねの夢に古宮のみえ給けれは
さめていと名残かなしくおほしてもりぬれ
たるひさしのはしつかたをしのこはせてこゝかし
このおましひきつくろはせなとしつゝれいな
らすよつき給て

19ウ

なき人をこふるたもとのひまなきにあれ
たる軒のしつくさへそふも心くるしきほとに
なん有けるこれみついりてめくる〳〵人をと
するかたやあると見るにいさゝか人けもせす
されはこそ衍(往)来の道に見いるれと人すみけ
もなき物をと思ひてかへりまいるほとに月
あかくさし出たるに見れはかうしふたまはかり
あな(ママ)けてすたれうこく気色なりわつかに見つ
けたるこゝちおそろしくさへおほゆれとよりて

20オ

こはつくれはいと物ふりたる声にてまつし
はふきをさきにたてゝかれはたれそ何人そ
ととふなのりして侍従の君ときこえしに人に
たいめん給はらんといふそれはほかになんものし給
されとおほしわくましき女なんはへるといふこゑ
いたふねひすきたれときゝしをひ人と聞し
りたりうちには思ひもよらすかりきぬすかた
なるおとこの忍ひやかにもてなしてなこやか
なれは見ならはす也けるめにてもしきつね
なとのへんけにやとおほゆれとちかうより

20ウ

てたしかになんうけ給はらまほしきかはらぬ御
有さまならは尋きこえさせ給へき御心さしもた
たえすなんおはしますめる〇こよひも行すきかてに
とまらせ給へるをいかゝきこえさせんうしろやすく
をといへは女ともうちわらひてかはらせ給御有さま
ならはかゝるあさちかはらをうつろひ給はては
侍なんやたゝをしはかりてきこえさせ給へかし年

へたる人の心にもたくひあらしとのみめつらかなる
よをこそはみたてまつりすくし侍れとやゝくつ
しいてゝとはすかたりもしつへきかむつかしけ

21オ

れはよし〳〵まつかくきこえさせんとてまいり
ぬなとかいとひさしかりつるいかにそむかしの
跡もみえぬにもきのしけさかなとの給へはしか
〳〵なんたとりよりて侍つる侍従かをはの
少将といひ侍しをひ人なんかはらぬこゑにて侍り
つると有さまきこゆいみしうあはれにかゝるしけ
き中になに心ちしてすゝし給らんいまゝてとは
さりけるよと我御心のなさけなきもおほし
しらるいかゝすへきかゝる忍ひありきもかたか
るへきをかゝるつゐてならては立よらしかはら

21ウ

ぬ有さまならはけにさこそはあらめとをしは
かしらるゝ人さまになんとはのたまひなからふといり
給はん事〇をつゝましくおほさるゆへある御せう

そこもいときこえまほしけれと見給し程のく
ちをそさもまたかはらすは御つかひのたちわ
つらはんもいとをしうおほしとゝめつこれみつ
もさらにえわけさせ給ましきよもきの露
けさになん侍露すこしはらはせてなんいらせ
給へきときこゆれは

尋ても我こそとよ(は)め道もなくふかき

22オ

よもきのもとの心をとひとりこちてなをおり
給へはみさきの露を馬のむちしてはらひつゝ
いれたてまつるあまそゝきもなを秋のしく
れめきてうちそゝけは御(み)かささふらふけにこの
した露は雨にまさりてときこゆ御さしぬきの
すそはいたうそほちぬめりむかしたにあるか
なきかなりし中門なとましてかたもなくなり
ていり給につけてもいとむとくなるをたち
ましり見る人なきそ心やすかりける・姫君は
さりともとまちすくし給へる心もしるくうれし

けれといとはつかしき御有さまにてたいめんせ
むもいとつ(はつかゝ)ましくおほしたり大弐の北のかたた
てまつりをきし御そともをも心ゆかすおほされ
しゆかりに見いれ給はさりけるをこの人々の
かうの御からひつに入たりけるかいとなつかしき
かしたるをたてまつりけれはいかゝはせんにきか
へ給てかのすゝけたる御き丁引よせておはす
いり給て・としころのへたてにも心はかりはかはら
すなん思ひやりきこえつるをさしもおとろ
かい給はぬうらめしさにいまゝて心みきこえつる

22ウ

をすきならぬこたちのしるま(さ)にえすきてなんまけ
きこえにけるとてかたひらをすこしかきやり
給へれはれいのいとつゝましけにとみにもい
らへきこえたまはすかくはかり分入給つるかあさ
からぬに思をこしてそほのかにきこえ出給ける
かゝる草かくれにすくし給ける年月のあはれ

23オ

もをろかならすまたかはらぬ心ならひに人の御心の
うちもたとりしらすなからわけ入侍りつる露
けさなとをいかゝおほすとしころのをこたり
はたなへてのよにおほしゆるすらんいまより

23ウ

後の御心にしかなはさらんなんいひしにたかふつ
みもおふへきなとさしもおほされぬ事も情な
さけしうきこえなし給事共もわむめり立
とゝまり給はんも所のさまよりはしめまはゆき
御有さまなれはつき〳〵しくの給ひすへして出給
なんとすひきうへしならねと松のこ高くなりに
ける年月の程もあはれに夢のやうなる御身
の有さまもおほしつゝけゝる
　藤なみのうちすきかたく見えつるは松こそ
やとのしるしなりけれかそふれはこよなうつも
りぬらんかし宮こにかはりにけることのおほかりけ
るもさま〳〵哀になん今のとかにそひなのわ

24オ

かれにおとろへしよの物かたりもきこえつくすへ
き又とし経給ひつらん春秋のくらしかたさなと
も誰にかはうれへ給はんとうらもなくおほゆるも
かつはあやしうなんなときこえ給へは
　年をへてまつしるしなきわかやとを花の
たよりに過ぬはかりかとしのひやかにうちみしろ
き給へるけはひも袖のかもむかしよりはねひま
さり給へるにやとおほさる月いりかたになりて

24ウ

にしのつまとのあきたるよりさはるへきわたとの
たつ屋もなく軒のつまものこりなけれはいと
はなやかにさしいりたれはあたり〳〵みゆるにむかし
にかはらぬ御しつらひのさまなとしのふ草にや
つれたるうへの見るめよりはみやよひかにみゆる
をむかしものかたりに塔こほちたる人のあり
けるをおほしあはするにおなしさまにてと
しふりにけるも哀なりひたふるにものつゝみ
したるけはひのさすかにあてやかなるも心に

くゝおほされてさるかたにて忘しと心くるしく
思ひしをとしころさま〳〵のものおもひにほれ〳〵
しくてへたてつるほとつらしとおもはれつらん
といとをしくおほす・かの花ちる里もあさやかに
今めかしうなとははなやき給はぬ所にて御め
うつしこよなからぬにとかおほうかくれにけりま
つりこけいなとのほと御いそきともにことつけ
て人のたてまつりたるもの色々におほかる
をさるへきかきり御心くはへ給なかにもこの宮
にはこまやかにおほしよりてむつましき人々に
おほせことたまひしもへともなとつかはして

25オ

よもきはらはせめくりの見くるしきにいたか
きといふものうちかためつくろはせ給かうたつ
ね出給へりときゝつたへんにつけても我御
ため〇むほくなけれはわたり給事はなし御文
いとこまやかにかき給て二条院いとちかき

ところをつくらせ給をそこになんわたくしたて
まつるへきよろしきわらはへなともとめさふらは
せ給へなと人のうへまておほしやりつゝとふらひ
きこえ給へはかくあやしきよもきのもとにはをき
ところなきまて女はらもそらをあふきてなん

26オ

そなたにむきてよろこひきこえける・なけの御
すさひにてもをしなへたるよのつねの人をは
めとゝめみゝたて給はすよにすこしこれはと
おもほえ心ちにとまるふしあるあたりをたつ
ねより給ものと人のしりたるにかくひき〇かへ
なにこともなのめにたにあらぬ御有さまをも
のめかしいて給ふはいかなりける御心にか
有けんこれもむかしのちきりなめりかし・今
はかきりとあなつりはてゝさま〳〵にきほひ
ちりあかれしうへしもの人々我も〳〵まいらむ
とあらそひいつる人も有こゝろはへなとはた

26ウ

むもれいたきまてよくおはする御有さま
に心やすくならひてことなることなきなます
りやうなとやうのいへにある人はならはす
はしたなきこゝちするもありてうちつけの
心みえにまいりかへるきみはいにし〇へにもまさ
りたる御いきほひのほとにて物の思ひや
りもましてそひ給ひにけれはこまやかにお
ほしをき〇てたるにゝほひいてて宮のうちやう〳〵
人目見え木草の葉もたゝすこく哀にみえ

27オ

なされしをやり水かきはらひせんさいのもとた
ちもすゝしうしなしなとしてことなるおほえ
なきしもけいしのことにつかまつらまほしきはう
かく御心とゝめておほさる〇事なめりとみとり
て御けしき給はりつゝつゐせうしつかうまつ
るふたとせはかりこのふる宮になかめ給てひん
かしの院といふところになん後はわたしたてま
つり給けるたいめんし給ことなとはいとかた
けれとちかきしめの程にておほかたにも
わたり給にさしのそきなとし給つゝいとあな

27ウ

つらはしけにもてなしきこえ給はすかの大
弐の北の方のほりておとろきおもへるさま
しゝうかうれしきものゝ今しはしまちきこえ
さりけるも心あさゝをはつかしう思へるほと
なとを今すこしとはすかたりもせま〇しけれ
といとかしらいたくうるさく物うけれは今ま
たもさつていてあらんおりに思ひいてゝなん
きこゆへきとそ

28オ

（せき屋）

伊よのすけといひしはこ院かくれさせ給て又の
年ひたちになりてくたりしかはかのはゝきゝも
いさなはれにけりすまの御旅ゐもはるかにきゝ
て人しれすおもひやりきこえぬにしもあらさり
しかとつたへきこゆへきよすかたにかくてつくは
ねの山をふきこす風もうきたる心ちしていさ
さかのつたへたになくて年月かさなりにけりか
きれる事もなかりし御たひゐなれと京にかへ
りすみ給て又のとしのあきそひたちはのほり
けるせきいる日しもこの殿いし山に御願はた

1オ

しにまうて給ふけり京よりかの紀伊守なと
いひしこともむかへにきたる人〳〵このとのかくま
うて給へしとつけけれはみちのほとさはかしかり
なむ物そととてまたあかつきよりいそきけるを女
くるまおほく所せうゆるきくるに日たけぬうち
いてのはまくるほとに殿はあはた山こえ給ぬとて御
せむの人〳〵みちもさりあへすきこみぬれはせき
にみなおりゐてこゝかしこのすきのしたに車と
もかきおろし木かくれにゐかしこまりてすくし
たてまつるくるまなとかたへはをくらかしさきに

1ウ

たてなとしたれとなをる〇ひろくみゆくるまとを
はかりそ袖くち物の色あひなとももりいてゝみえ
たるゐ中ひすよしありて斎宮の御くたりなにそ
やうの〇物見くるまおほしいてらる・殿もかくよにさか
へいて給めつらしさにかすもなき御せむともみな
めとゝめたり・九月つこもりなれは紅葉の色〳〵
こきませ霜かれの草むら〳〵おかしうみえわたるに
関屋よりさとはつれいてたるたひすかたとものいろ
いろのあをのつき〳〵しきぬひ物くゝりそめのさま
もさるかたにおかしうみゆ御くるまはすたれおろし

2オ

給てかのむかしのこきみ右衛門のすけなるをめ
しよせてけふの御せきむかへはえおもひすて
給はしなとのたまふ御心のうちいとあはれにおほし
いつる事おほかれとおほそふにてかひなし女も
人しれすむかしの事わすれねはとりかへして物
あはれなり

ゆくとくとせきとめかたきなみたをやたえぬ
し水と人は見るらむえしり給はしかしとおもふ
にいとかひなし・いし山よりいて給御むかへに右ゑもん
のすけまいれり一日まかりすきしかしこまりなと申

2ウ

むかしわらはにていとむつましうらうたきものに
したまひしかはかうふりなとえしまてこの御とく
にかくれたりしをおほえぬ世のさはきありしこ
ろものゝきこえにはゝかりてひたちにくたりしを
そすこし御心をきてとしころはおほしけれと色
にもいたし給はすむかしのやうにこそあらねとな
をしたしきいゑ人のうちにはかそへ給けり・きの
かみといひしもいまはかうちのかみにそなりにける
そのおとうとの右近の世(そ)うとけて御ともにくた
りしをそとりわきてなしいて給けれはそれにそ

3オ

たれもおもひしりてなとてすこしも世にした
かふ心をつかひけむ(な)〇とおもひいてけるすけめしよせ
て御せうそこありいまはおほしわすれぬへき事
を心なかくもおはするかなとおもひゐたり一日は
ちきりしられしをさはおほししりけむや

わくらはにゆきあふみちをたのみしもなを
かひなしやしほならぬうみせきもりのさもうら
やましくめさましかりしかなとあり・としころのと
たえもうひ〳〵しくなりにけれと心にはいつとなく
たゝいまのこゝちするならひになむすき〳〵しう

3ウ

いとゝにくまれむやとて給へれはかたしけなくても
ていきてなをきこえたまへむかしにはすこしおほ
しのく事あらむとおもひ給ふるにおなしやう

なる御心のなつかしさなむいとゝありかたきすさひ
ことそようなき事とおもへとえこそすくよかに
きこえかへさね女にてはまけきこえ給へらむにつみ
ゆるされぬへしなといふいまはましていとはつかしう
よろつの事うひ〳〵しきこゝちすれとめつらしき
にやえしのは〇さりけむ

あふさかのせきやいかなるせきなれはしけき

4オ

なけきの中をわくらむゆめのやうになむときこ
えたりあはれもつらさもわすれぬふしとおほし
をかれたる人なれはおり〳〵はなをのたまひう
こかしけり・かゝるほとにこのひたちのかみおいのつ
もりにやなやましくのみして物心ほそかりけれ
はこともにたゝこの君の御事をのみいひをき
てよろつの事たゝこの御心にのみまかせてあり
つるよにかはらてつかうまつれとのみあけくれ
いひけり女君心うきすくせありてこの人にさへ
をくれていかなるさまにはふれまとふへきにかあ

らむとおもひなけき給を見るにいのちのかきり
あるものなれはおしみとゝむ〇へきかたもなしいかて
かこの人の御ためにのこしをく玉しゐもかなわかこ
ともの心もしらぬをとうしろめたうかなしきこ
とにいひおもへと心にえとゝめぬ物にてうせぬし
はしこそさのたまひし物をなとなさけつくれと
うはへこそあれつらき事おほかりとあるもかゝる
も世のことはりなれは身ひとつのうき事にてなけ
きあかしくらすたゝこのかうちのかみのみそむかし
よりすき心ありてすこしなさけかりけるあはれにの

5オ

たまひをきしをかすならすともおほしうとまて
のたまはせよなとついそ〇せうしよりていとあさまし
き心のみえけれはうきすくせある身にてかくいき
とまりてはて〳〵はめつらしき事ともをきゝ
そふるかなと人しれすおもひしりて人にさな
むともしらせてあまになりにけりある人〳〵

4ウ

いふかひなしと思ひなけくかみもいとつらうをの
れをいとひ給ほとにのこりの御よはひはおほく
物し給ふらむいかてかすこし給へきなとそあいな
のさかしらやなとそ侍める

5ウ

（てならひ）

その比よ川になにかし僧都とかいひていと
たうとき人すみけり八十あまりの母五十
はかりのいもうとありけりふるき願ありて
はつせにまうてたりけり・むつましくやむ
ことなく思ふてしのあさりをそへて仏経
くやうすることおこなひけりことゝもおほ
くしてかへる道になら坂といふ山こえ
けるほとより此あま君こゝちあしくしけ
れはかくてはいかてかのこりのみちをもお
はしつかんともてさはきて宇治のわたり

1オ

にしりたりける人の家有けるにとゝめて
けふはかりやすめたてまつるになをいたく
わつらへはよ川にせうそこしたり山こもり
のほいふかくことしはいてしとおもひけれとか
きりのさまなるおやのみちの空にてな
くやならむとおとろきていそき物したまへ
りおしむへくもあらぬ人のさまをみつからも
弟子の中にもけんあるしてかちしさはくを
いゑあるしきゝてみたけさうしゝ侍をいた
くおいたまへる人のをもくなやみ給ふはい

1ウ

かゝとうしろめたけにおもひていひけれは
さもいふへきことゝいとをしく思ていとせ
はくむつましくもあれはやう〳〵ゑてたて
まつるへきになかゝみふたかりてれいすみ給
ふ所はいむへかりけるを故朱雀院の御りや
うにて宇治〇院といひし所このわたりならん
とおもひ出てゑんもり僧都しりたまへり
けれは一二日やとらんといひにやり給へりけ
れははつせになんきのふみなまうてにける
とていとあやしきやともりのおきなをよひ

2オ

てゐてきたりおはしまさはゝやいたつらなる
院のしんてんにこそ侍るめれ物まうての人
はつねにそやとり給ふといへはいとよかむな
りおほやけ所なれと人もなく心やすきを
とて見せにやり給ふこのおきなれいもかく
やとる人を〇見ならひたりけれはおろそかなる
しつらひなとしてきたりまつ僧都わたり給
いといたくあれておそろしけなる所かなと
見給ひてたいとこたち経よめなとの給・
このはつせにそひたりしあさりとおなしや

うなる〇今ひとり〇イ無なに事のあるにかつき〳〵
しきほとのけらうほうしに火ともさせて
人もよらぬうしろのかたにいきたりもり
かと見ゆる木のしたをうとましけのわた
りやとみいれたるにしろきものゝひろこり
たるそ見ゆるかれはなにそと立とまりて
火をあかくなして見れは物のゐたるすかた

2ウ

なりきつねのへんくゑしたるにくしみ
あらはさむとてひとりはいますこしあゆみ
よるいまひとりはあなようなよからぬ物ならん

3オ

といひてさやうの物しそくへきいんをつくり
つゝさすかになをまもるかしらのかみあらはふと
りぬへき心ちするに此火ともしたるたいと
こはゝかりもなくあふなきさまにてちかくより
てそのさまをみれはかみゐはなかくつや〳〵と
しておほきなる木のまゆねのいとあら〳〵しき
によりゐていみしくなくめつらしきことにも
侍る哉と僧都の御坊に御らんせさせたて
まつらはやといへはけにあやしきことなりとて
ひとりはまうてゝかゝることなんとまうすきつ

3ウ

ねの人にへんくゑするとはむかしよりきけと
またみぬ物なりとてわさとおりておはすかの
わたり給はんとすることによりてけすともは

みなはか〳〵しきはみへし所なとあるへかしきこと
ともをかゝるわたりにはいそく物なりけれはゐ
しつまりなとしたるにたゝ四五人してこ
こなる物を見るにかはることもなしあやし
くて時のうつるまてみるとく夜も明はて
なん人かなにそと見あらはさんと心にさる
へき真言をよみいむをつくりて心みるにし

4オ

るくやおもふらんこれは人なりさらにひさうの
けしからぬ物にあらすよりてとへなくなり
たる人にはあらぬにこそあめれもししにたる
人をすてたりけるかよみかへりたるかと
いふなにのさる人をかこの院のうちにすて侍
らんたとひまことに人なりともきつねこた
まやうの物のあさむきてとりもてきたらん
にこそ侍らめいとふひんにも侍けるかなけ
からひあるへき所にこそ侍めれといひてあり
つるやともりのをのこをよふ山ひこのこたふ

4ウ

るもいとおそろしあやしのさまにひたいをし
あけていて来たりこゝにはわかき女なとやす
み給かゝることなんあるとてみすれはきつ
ねのつかまつるなりこの木のもとになんと
き〳〵あやしきわさし侍ををとゝしの秋も
こゝに侍る人の〇ふたつはかりには小りしをとり
てまうてきたりしかともみおとろかす侍ゐ
まきつねはさこそ〇人はをひやかせとことにも
あらぬやつといふさまいとなれたりかの夜
ふかきまいりものゝ所に心をよせたるなるへし・

5オ

僧都さらはさやうの物のしたるわさか猶よく
みよとて此物をちせぬほうしをよせたれは
鬼か神かきつねかこたまかかはかりの天の
したのけんさのおはしますにはえかくれたて
まつらし名のりたまへ〳〵ときぬをとりて
ひけはかほを引いれていよ〳〵なくいてあな

さかなのこたまのおにやまさにかくれなん
やといひつゝかほをみんとするにむかしあり
けんめもはなもなかりけんめおにゝやあら
むとむくつけきをたのもしくいかきさま

5ウ

を人に見せんとおもひてきぬをひきぬか
せんとすれはうつふして声たつはかりなく
なにゝまれかくあやしきこと世にあらしとて
見はてんと思に雨いたくふりぬへしかくてを
いたらはしにはて侍りぬへしかきのもとに
こそいたさめといふ僧都まことの人のかた
ちなりその命たえぬを見る〳〵すてんこと
いみしきことなりいけにをよくいを山にな
くしかをたに人にとらへられてしなんとする
を見つゝたすけさらむはいとかなしかるへし

6オ

人のいのちひさしかるましきものなれとのこ
りの命一二日をもおしますはあるへからすおに
にも神にもりやうせられ人におはれ人に
はかりこたれてもこれよこさまのしにをす
へき物にこそはあめれ仏のかならすゝくひ
たまふへききはなり猶心みにしはしゆを
のませなとしてたすけ心みんつゐにしぬ
へくはいふかきりにあらすとのたまふてこの
たいとこしていたきいれ〇す給ふてしとも
たい〳〵しきわさかないたくわつらひ給人

の御あたりによからぬ物をとりいれすけから
ひかならす出きなんとすともとくもあり又
ものゝへんくゑにもあれめにみす〳〵いける
人をかゝるあめにうちうしなはせむはいみし
きことなれはなんと心こゝろにいふけすなとは
いとさはかしく物をうたていひなす物なれは
人さはかしからぬかくれのかたになんふせたり
ける・御車よせており給ふほといたくくるし
かり給ふとてのゝしるすこししつまりて僧

6ウ

都ありつる人はいかゝなりぬるとゝひたまふ

なよ〳〵として物もいはすいきもし侍らす何か
物にけとられにける人にこそといふをいもう
とのあま君きゝ給ひてなに事そとゝふ
しか〳〵のことをなん六十にあまるとしめつら
かなる物をみたまへつるとの給ふうちきく
まゝにをのかてらにてみしゆめありきいかや
うなる人そまつそのさまみんとなきてのた
まふたゝこのひんかしのやり戸になむは侍
るはや御らんせよといへはいそきいきてみる
に人もよりつかてそ捨をきたりけるいと

7オ

わかくうつくしけなる女のしろきあやのきぬ
ひとかさねくれなゐのはかまそきたるかは
いみしくかうはしくてあてなるけはひかきり
なしたゝわかこひかなしむむすめのかへりおは
したるなめりとてなく〳〵士たちをいたして

7ウ

いたきいれさすいかなりつらんともありさま
みぬ人はをそろしからていたきいれつい
けるやうにもあらてさすかに目をほのかに
見あけたるに物のたまへやいかなる人か
かくては物したまへるといへと物おほえぬ

さゝ間なりゆとりてゝつからすくひいれなとする
にたゝよはりにたえ入やうなりけれは
なか〳〵いみしきわさかなとて此人なくなり
ぬへしかちしたまへとけんさのあさりにいふ
されはこそあやしき御物あつかひなりとは
いへとかみなとの御ために経よみつゝい
のるそうつもさしのそきていかにそなに
のしわさそとよくてうしてとへとのたま
へと〇よはけにきえもていくやうなれはえい
き侍らしすゝろなるけからひにこもりてわつ

8オ

らふへきことさすかにいとやむことなき

8ウ

人にこそ侍めれしにはつともたゝにやは
すてさせたまはん見くるしきわさかなとい
ひあへりあなかま人にきかすなわつらはしき
こともそあるなと口かためつゝあま君は
おやのわつらひたまふよりもこの人をいけ
はてゝみまほしくおしみてうちつけにそひゐ
たりしらぬ人なれとみめのこよなくおかし
けれはいたつらになさしと見るかきりあつ
かひさはきけりさすかに時々め見あけなとし

9オ

つゝなみたのつきせすなかるゝをあな心う
やいみしくかなしとおもふ人のかはりに仏
の道ひきたまへると思ひきこゆるをか
ひなくなり給はゝ中〳〵なることをやおも
はんさるへきちきりにてこそかく見たてま
つらめ猶いさゝか物のたまへといひつゝくれ
とからうしていき出たりともあやしきふよ
うの人なり人に見せてよるこの河におと

し入たまひてよといきのしたにいふまれ〳〵
物のたまふをうれしとおもふにあないみしやい

9ウ

かなれはかく〇(は)のたまふそいかにしてさる所には
おはしつるそととへとも物もいはすなりぬ身
にもしきすなとやあらんとてみれとこゝはと
みゆる所なくうつくしけれはあさましくか
なしくまことに人の心まとはさんとて出き
たるかりの物にやとうたかふ・二日はかりこ
もりゐてふたりの人をいのりかちする
声たえすあやしきことをおもひさはくそのわ
たりのけすなとのそうつにつかまつりける
かくておはしますなりとてとふらひ出くるも

10オ

物かたりなとしていふをきけは故小(八)の宮の御
むすめ右大将とのゝかよひ給しことになや
みたまふこともなくてにはかにかくれたまへ
りとてさはき侍その御さうそうのさう

しともつかふまつり侍るとて昨日はえま
いり侍らさりしといふさやうの人のたましゐ
を鬼のとりてもてきたるにやとおもふにも
かつみる〳〵あるものともおほえすあやうく
おそろしとおほす人々よへみやられし火は
しかこと〳〵しきけしきも見えさりしをといふ

10ウ

ことさらことそきていかめしくも侍らさりしと
いふけからひたる人とてたちなからをひかへ
しつ・大将殿はみやの御むすめもちたまへ
りしはうせ給てとしころになりぬる物をた
れをいふにかあらんひめ宮をゝきたてまつ
り給てよにこと心をはせしなといふ・あま君
よろしくなり給ぬかたもあきぬれはかくうた
てある所にひさしくおはせむもひんなしとて
かへるこの人は猶いとよはけなりみちのほと
もいかゝものし給はんいと心くるしきことゝいひ

11オ

あへりくるまふたつしておい人のりたまへる
にはつかうまつるあまふたりつきのにはこ
のひとをふせてかたはらに今人ひとり〇(のり)そ
ひて道すからゆきもやらすくるまとめ
てゆまいりなとし給・ひえさかもとにを野と
いふ所にそ住たまひけるそこにおはしつ〻
くほといととをしなかやとりをまうくへか
りけるなといひて夜ふけておはしつきぬ・
僧都はおやをあつかひむすめのあま君は
このしらぬ人をはくゝみてみないたきおろ

11ウ

しつゝやすむおいのやまひのいつともなき
かくるしと思たまへしとをみちの名こりこ
そしはしわつらひ給ひけれやう〳〵よろしく
成たまひにけれは僧都はのほり給ひぬ・かゝる
人なんゐてきたるなとほうしのあたりには
よからぬことなれは見さりし人にはまねは
すあま君もみなくちかためさせつゝもし

尋くる人もやあるとおもふもしつ心なし
いかてさるゐ中人のすむあたりにかゝる
人おちあふれけん物まうてなとしたり

12オ

ける人の心ちなとわつらひけんをまゝは、
なとやうの人のたはかりてをかせたるに
やとそおもひよりける・河になかしてよとい
ひしひとことよりほかに物もさらにのたまは
ねはいとおほつかなくおもひていつしか人に
もなしてみんとおもふにつく〳〵としておきあ
かるよもなくいとあやしくのみ物したまへは
つゐにいくましき人にやとおもひなから打
すてんもいとおしくいみし・夢かたりも
し出てはしめよりいのらせしあさりにもしの

12ウ

ひやかにけしやくことせさせ給うちはゆへかく
あつかふほとに四五月も過ぬいとわひしく
かひなき事を思ひ侘て僧都の御もとに

猶をり給へ此人たすけ給へさすかにけふ
まてもあるはしぬましかりける人をつき
しみりやうしたる物のさらぬにこそあめ
れあか仏京に出給はゝこそあらめこゝまては
あへなむなといみしき事をかきつゝけて
たてまつ〇給(れ)へれはいとあやしきことかな
かくまてもありける人のいのちをやかて

13オ

うちすてましかはさるへき契ありてこそは
我しも見つけゝめ心みにたすけはてむかし
それにとまらすはこうつきにけりとおもはん
とてをり〇給(給)へり・よろこひをかみて月ころ
のありさまをかたるかくひさしくわつらふ
人はむつかしきことをのつからあるへきをい
さゝかおとろへすいときよけにねちけた
る所なくのみ物し給てかきりとみえな
からもかくてもいきたるわさなりけりなと
おほな〳〵なく〳〵の給へはみつけしよりめつ

らかなる人の御あり様かないてとてさし
のそきて見給てけにいときやうさくなり
ける人の御ようめいかなくとくのむくひに
こそかゝるかたちにもおい出給ひけめいかなる
たかひめにてかくそこなはれたまひけんも
しさにやときゝあはせらるゝ事もなしや
ととひ給・さらに聞ゆることもなしなにか
は〇はつせ（はせ マナンシイ）の観音のたまへる人なりとのたまへ
はなにかそれえんにしたかひてこそ道ひき
給はめたねなき事はいかてかなとのたまふ

13ウ

あやしかりてすほうはしめたりおほやけのめ
しにたにしたかはすふかくこもりたる山を
出給てすゝろにかゝる人のためになんおこ
なひさはき給と物のきこえあらんいときゝ
にくかるへしとおほし弟子ともゝいひて人に
きかせしとかくす・僧都いてあなかまたいと

14オ

こたちわれむさむの法師にていむことの中
にやふるかいはおほからめとをんなのすち
につけてまたそしりとらすあやまつこと
なしよはひ六十にあまりていまさらに人の

14ウ

もときおはんはさるへきにこそあらめとのたまへ
はよからぬ人の物をひんなくいひなし侍とき
には仏法のきすとなり侍るなりと心よか
らすいふ・このすほうのほとにしるしみえすは
といみしきことゝもをちかひ給てよひとよ
かちし給へるあかつきに人にかりうつしてな
にやうの物のかく人をまとはしたるそとあ
りさまはかりいはせまほしくて弟子のあさ
りとり〳〵にかちし給月比いさゝかもあらはれ
さりつる物のけてうせられて・をのれはこゝ

15オ

まてまふ（う）てきてかくてうせられたてまつる
へき身にもあらす昔はおこなひせし法師

のいさゝかなるよにうらみをとゝめてたゝ
よひありきし程によき女のあまたすみ
給し所にすみつきてかたへはうしなひてしに
この人は心と世をうらみ給てわれいかて
しなんといふ事をよるひるの給ひしにた
よりをえていとくらき夜ひとり物し給し
をとりてしなりされとくはんをんとさまかう
さまにはくゝみ給けれは此僧都にまけ

15ウ

たてまつりぬ今はまかりなんとのゝしる
かくいふはなにそとゝへはつきたる人ものは
かなきけにやはか〳〵しくもいはすさうしみの
心ちはさはやかにいさゝか物おほえて見まはし
たれはひとりみし人のかほはなくてみなお
いほうしゆかみおとろへたる物とものみおほか
れはしらぬくにゝきにける心ちしていと
かなしありしよのことおもひ出れとすみけん
ところたれといひし人とたにたしかに
はか〳〵しくもおほえすたゝ我はかきりとて

16オ

身をなけし人そかしいつこにきにたるに
かとせめておもひいつれはいといみしと物を
おもひなけきてみな人のねたりしに妻戸
をはなして出たりしに風はけしく河なみも
あらふきこえしをひとりものをそろし
かりしかはきしかた行すゑもおほえてす
のこのはしに足をさしおろしなからいくへき
かたもまとはれてかへりいらんも中空にて
心つよくこのよにうせなんと思たちしを
をこかましくて人に見つけられんよりは

16ウ

をにもなにもくひてうしなひてよといひ
つゝつく〳〵とゐたりしをいときよけなるお
とこのよりきていさ給へをのかもとへとい
ひていたく心ちせしをみやときこえし人の
し給とおほえしほとより心ちまとひに

けるなめりしらぬ所にすへをきて此男き
え失ぬと見しをつゐにかくほいのことも
せすなりぬると思ひつゝいみしくなくと
思ひしほとにそのゝちのことは○いかにも〳〵
おほえす・人のいふをきけはおほくの日来

17オ

もへにけりいかにうきさまをしらぬ人に
あつかはれ見えつらんとはつかしくつゐにかくて
いきかへりぬるかとおもふも口おしけれはいみ
しくおほえてなか〳〵しつみ給へりつる日
ころはうつし心もなきさまにて物いさゝかま
いるおりもありつるを露はかりのゆをたに
まいらす・いかなれはかくたのもしけなくのみは
をはするそうちはへぬるみなとし給へること
はさめ給てさはやかに見え給へはうれしく
おもひきこゆるをとなく〳〵たゆむおりなく

17ウ

らしき御さまかたちをみれは心をつくしてそ
おしみまもりける・心には猶いかてしなんと
そ思わたり給へとさはかりにていきとまり
たる人の命なれはいとしうねくてやう〳〵
かしらもたけ給へは物まいりなとし給に
そなか〳〵おもやせもていくいつしかとうれし
くおもひきこゆるにあまになし給てよさ
てのみなんいくやうもあるへきとのたまへ
はいとをしけなる御さまをいかてかさはな

したてまつらんとてたゝいたたきはかりを
そき五かいはかりをうけさせたてまつる心
もとなけれともとよりをれ〳〵しき人の
心にてえさかしくしゐてものたまはす僧
都はいまはかはかりにていたはりやめたて
まつり給へといひをきてのほり給ぬ・夢
のやうなる人を見たてまつるかなとあま
君はよろこひてせめておこしすへつゝ御

18オ

くしてつかうけつり給さはかりあさましくひき
ゆひてうちやりたりつれといたくもみた

18ウ

れすときはてたれはつや〳〵とけふらなり
ひとゝせたらぬつくもかみおほかる所にて
めもあやにいみしき天人のあまくたれる
をみたらむやうにおもふもあやうき心ちすれと
なとかいと心うくかはかりいみしくおもひきこ
ゆるに御心をたてゝは見え給いつこにたれ
ときこえし人のさる所〇はいかておはせ
しそとせめてとふをいとはつかしとおもひて
あやしかりし程にみなわすれたるにやあら
むありけんさまなともさらにおほえ侍らす

19オ

たゝほのかにおもひ出る事とてはたゝいか
て此世にあらしとおもひつゝ夕くれことに
はしちかくてなかめしほとにまへちかくおほ
きなる木のありししたより人の出き

てゐていく心ちなんせしそれよりほかのこと
は我なから誰とも〇おもひいてられ侍らすと
いとらうたけにいひなして世中に猶あり
けりといかて人にしられしきゝつくる人も
あらはいといみしくこそとてない給あまり
とふをはくるしとおほしたれはえとはす

19ウ

かくやひめを見つけたりけんたけとりの
おきなよりもめつらしき心ちするにいかなる
物のひまにきえうせんとすらむとしつこゝ
ろなくそおほしける・此あるしもあてなる
人なりけりむすめのあま君はかんたちめ
のきたのかたにてありけるかその人な
くなり給て後むすめたゝひとりをいみし
くかしつきてよききんたちをむこにして
おもひあつかひけるをそのむすめのなく
なりにけれは心うしいみしとおもひ入てか

たちをもかへかゝる山里には住はしめたる
なりけり夜とゝもに恋わたり人の形見
に〇おもひよそへつへからん人をたに見出てし〇
な〇つれ〳〵も心ほそきまゝに思なけきけ
るをかくおほえぬ人のかたちけはひもま
さりさまなるをえたれはうつゝのことゝもおほ
えすあやしき心ちしなからうれしとおもふ・
ねひにたれといときよけによしありて
ありさまもあてはかなりむかしの山さと
よりは水のをともなこやかなりつくりさ

20ウ

まゆへある所のこたちおもしろくせんさい
なともおかしくゆへをつくしたり・秋になり
ゆけは空のけはひあはれなるをかと田
のいねかるとて所につけたる物まねひし
つゝわかき女ともはうたうたひけうしあへりひ
たひきならすをともおかしく見しあつま
ちの事〇ともおもひいてられてかの夕きり

のみやすところのおはせし山さとよりは今
すこしいりて山にかたかけたる家なれは松
かけしけく風のをともいと心ほそきにつれ

21オ

つれにをこなひをのみしつゝいつともなくし
めやかなり・あま君そ月なとあかき夜はき
むなとひき給ふ少将のあま君なといふ
人はひわ引なとしつゝあそふかゝるわさは
し給やつれ〳〵なるになといふむかしもあ
やしかりける身にて心のとかにさやうのこと
すへきほともなかりしかはいさゝかおかしきさ
まならすもおひいてにける哉とかくさた
すきける人の心〇やるめるおり〳〵につけて
はおもひいつ・なをあさましく物はかなかり

21ウ

けると我なからくちおしけれは手ならひに
身をなけしなみたの河のはやきせをしから
みかけてたれかとゝめしおもひの外に心う

けれは行すゑもうしろめたくうとましき
まておもひやらる月のあかきよな〳〵おひ
人ともはえんに歌よみいにしへおもひ出つゝ
さま〳〵の物かたりなとするにいらふへき
かたもなけれはつく〳〵とうちなかめて
　われかくてうき世中にめゆるともたれかはしらん
月の都にいまはかきりと思はてしほとは恋しき

22オ

人おほかりしかとこと人〳〵はさしもおもひ出
られすたゝおやいかにまとひ給けんめのとよ
ろつにいかてひとなみ〳〵になさんとおもひ
いられしをいかにあへなき心ちしけんいつこにあ
らんわれよにあるものとはいかてかしらん
おなし心なる人もなかりしまゝによろつへ
たつることなくかたらひみなれたりし右近
なともおり〳〵はおもひ出らる・わかき人のかゝ
る山里にいまはとおもひたえこもるはかたき
わさなりけれはたゝいたくとしへにける

あま七八人そつねの人にてありけるそれしから
むすめむまこやうのものともきやうにみやつ
かへするもことさまにてあるも時々そかよひ
けるかやうの人につけて見しわたりにゆき
かよひをのつからよに有けりとたれにも〳〵
きかれたてまつらんこといみしくはつかしかるへ
しいかなるさまにてさすらへけんなにおも
ひやりよつかすあやしかるへきをおもへはかゝ
る人〳〵にかけてもみえすたゝ侍従こも
きとてあま君のわか人にしたるふたりを

22ウ

のみそこの御かたにいひわきける見めも
心さまもむかしみし宮ことりにゝたることなし
何事につけても世中にあらぬ所はこれにや
やらんとそかつは思ひなされける・かくのみ人
にしられしと忍ひ給へはまことにわつらは
しかるへきゆへある人にも物し給らんとてく

23オ

はしきことある人〳〵にもしらせす・あま君の
むかしのむこの君今は中将にて物し給ける
をとうとのせんしの君僧都の御もとにもの
したまひける山こもりしたるをとふらひに

23ウ

はらからのきみたちつねにのほりけりよ川
にかよふみちのたよりによせて中将こゝに
おはしたりさきうちをひてあてやかなる
男のいりくるを見いたして忍ひやかにて
おはせし人の御さまけはひそさやかにおもひ
出らるゝこれもいと心ほそきすまゐのつれ〳〵
なれとすみつきたる人々は物きよけに
おかしくしなしてかきほにうへたるなてしこ
もおもしろくをみなへしきゝやうなと咲はし
めたるに色〳〵のかりきぬすかたのおとこ

24オ

とものわかきあまたして君もおなしさう
そくにてみなみおもてによひすへたれは

○うちなかめてゐたり○年廿七八のほとにて（1無）
ねひとゝのへこゝちなからぬさまもてつけ
たりあま君さうしくちにきちやうたてゝ
たいめんし給まつうちなきてとし比のつもり
には過にしかたいとゝけとをくのみなん侍
を山さとのひかりに猶まちきこえさする
ことのうちわすれすやみ侍らぬをかつはあや
しくおもひ給ふるとの給へは・心のうちあはれ

24ウ

に過にしかたのことゝもおもふ給へられぬおり
なきをあなかちにすみはなれかほなる
御ありさまに○（を）こたりつゝなむ山こもりもうら
やましくつねに出たち侍をおなしくはなと
したひまとはさるゝ人〳〵にさまたけらるゝ
やうに侍てなんけふはみなはふきすてゝ物
し侍つるとの給・山こもりの御うらやみは中
〳〵いまやうたちたる御物まねひになん
むかしをおほしわすれぬ御心はへも世になひ

かせ給はさりけるとおろかならす思給へら
るゝおりおほくなといふ・人〳〵に水はんなと
やうの物くはせ君にもはすのみなとやうの
物出したれはなれにしあたりにてさやうの
こともつゝみなき心ちして村雨のふりいつる
にとゝめられて物かたりしめやかにし給いふ
かひなくなりにし人よりもこの君の御心〇
なとのいとおもふやうなりしをよその物に
おもひなしたるなんいとかなしきなとわ
すれかたみをたにとゝめ給はすなりにけ
むとこひ忍ふる心なりけれはたまさかにか

25オ

く物したまへるにつけてもめつらしくあは
れにおほゆへかめるまゝにとはすかたりもし
いてつへし・ひめ君はわれは我とおもひ出る
かたおほくてなかめ出し給へるさまいとうつ
くし白きひとへのいとなさけなくあさやき

25ウ

たるにはかまもひはた色にならひたる
にやひかりも見えすくろきをきせたて
まつりたれはかゝることゝもゝみしにはかは
りてあやしくもあるかなとおもひつゝこ
は〳〵しくいらゝきたる物ともき給へる

26オ

しもいとをかしきすかたなりおまへなる
人〳〵こひめ君のおはしまいたる心ちのみ
しはへるに中将とのをさへみたてまつれは
いと哀にこそおなしくは昔のさまにておは
しまさせはやいとよき御あはひならんかし
といひあへるをあないみしやよにありて
いかにも〳〵人に見えんこそそれにつけてそ
むかしのことおもひ出らるへきさやうのすちは
おもひたえてわすれなんと思ふ・あま君入給
へるまにまらふとあめのけしきを見わつ

26ウ

らひて少将といひし人の声をきゝしり

てよひよせ給へり昔みし人〳〵はみなこゝに
物せらるらむやとおもひなからもかうまいり
くる事もかたくなりにたるを心あさきに
やたれも〳〵みなし給らんなとのたまふつ
かへまつりなれにし人にてあはれなりし
むかしのことゝももおもひ出たるつゐてに
かのらうのつまいりつるほと風のさはかし
かりつるまきれにすたれのひまよりなへて
のさまにはあるましかりつる人のうちた

27オ

れかみの見えつるは世をそむき給へるあ
たりにたれそとなむみおとろかれつると
の給・ひめ君のたち出給へりつるうしろ
てをみたまへりけるなめりとおもひてまし
てこまかに見せたらは心とまり給なんかし
昔人はいとこよなくをとり給へりしを
たにまたわすれかたくし給めるをと心ひとつ
に思て・すきにし御ことをわすれかたくなく
さめかね給めりしほとにおほえぬ人をえ
たてまつり給てあけ暮のみものにおも

27ウ

ひきこえ給めるをうちとけたまへる御あり
さまをいかてか御らんしつらんといふ・けること
こそはありけれとをかしくてなに人ならんけに
いとおかしかりつとほのかなりつるを中〳〵思い
つこまかにとへとそのまゝにもいはすをのつ
からきこしめしてんとのみいへはうちつけに
とひたつねんもさまあしき心ちして雨も
やみぬ日もくれぬへしといふにそゝのかさ
れて出給まへちかきをみなへしを折てなに
匂ふらんとくちすさみてひとりこちたてり・

28オ

人の物いひをさすかにおほしとかむるこそなと
こたいの人ともは物めてをしあへりいときよ
けにあらまほしくもねひまさり給にける
かなおなしくは昔のやうにても見たてまつ

らはやとて頭中納言の御あたりにはたえ
すかよひ給やかなれと心もとゝめ給はすお
やのとのかちになんものし給とこそいふなれ
とあま君もの給て・心うく物をのみおほ
しへたてたるなむいとつらきいまはな
をさるへきなめりとおほしなしてはれ〳〵し

28ウ

くもてなしたまへこのいつとせむとせときの
まもわすれす恋しくかなしとおもひつる
人のうへもかくみたてまつりて後よりはこよ
なくおもひわすれにて侍る思きこえ給
へき人〳〵よにおはすとも今は世になき物
にこそやう〳〵おほしなりぬらめよろつのこ
とさしあたりたるやうにはえしもあらぬわさ
になんといふにつけてもいとゝ涙くみて・へ
たてきこゆる心もは不らねとあやしくていき
かへりけるほとによろつことゆめのやうに

29オ

たとられてあらぬ世にむまれたる人はかゝる
心ちやすらんとおほえ侍れは今はしるへき
人世にあらんともおもひ出すひたみちに
こそむつましくおもひきこゆれとの給さま
もけに何心なくうつくしくうちゑみてそま
もりゐたまへる・中将は山におはしつきて僧
都もめつらしかりて世中の物かたりし給その
夜はとまりてこゑたうとき人〳〵に経なとよ
ませてよひと夜あそひ給せんしの君こま
かなる物かたりなとするついてにおのに立

29ウ

よりてものあはれにもありしかなよをすて
たれと猶さはかりの心はせある人はかたくこそ
なとの給つゐてに風のふきあけたり
つるひまよりかみいとなかくおかしけなる
人こそみえつれあらはなりとや思つらん
立てあなたに入つるうしろてなへての人と
は見えさりつさやうの所によき女はをきた

るましき物にこそあめれあけくれみる物は
法師なりをのつからめなれておほゆらん
ふひんなることなりかしとの給・せんしの

君此春はつせにまうてゝあやしくて見出た
る人となんきゝ侍しとてみぬことなれは
こまかにはいはすあはれなりけること哉
いかなる人にかあらん世中をうしとて
そさる所にはかくれゐけんかし昔物かたり
の心ちもするかなとの給またの日かへり
たまふにもすきかたくなんとておはしたり
さるへき心つかひしたりけれはむかしおもひ出
たる御まかなひの少将のあまなとも
そてくちさまことなれとをかしいとゝいや

30オ

めにあま君は物し給ものかたりのつゐてに
忍たるさまにものしたまふらんはたれにかと
とひ給わつらはしけれとほのかにも見つけ

給てけるをかくしかほならんもあやしとて忘
わひ侍りていとゝつみふかくのみおほえ侍つる
なくさめにこの月ころ見給ふる人になんい
かなるにかいと物おもひしけきさまにて世
にありと人にしられん事をくるしけに
おもひてものせらるれはかゝる谷の底には
たれかは尋ねきこえんとおもひつゝ侍をいかて

かはきゝあらはさせ給へらんとい〇ふ・うちつけ心
ありてまいりこんとたに山ふかき道のかこ
とはきこえつへしましておほしよそふらんかた
につけてはこと〳〵にへたて給ましきことに
こそはいかなるすちに世をうらみ給人にか
なくさめきこえはやなとゆかしけにの給出
たまふとてたゝうかみに

あたし野の風になひくなをみなへしわれ
しめゆはんみちとをくともとかきて少将のあ
ましていれたりあま君も見給てこの御かへり

31オ

かゝせ給へいと心にくきけつき給へる人なれ
はうしろめたくもあらしとそゝ(そ)のかせはいとあや
しき手をはいかてかとてさらにきゝ給はねは
はしたなきことなりとてあま君きこえさせ
つるやうによつかす人にゝぬ人にてなん
　うつしうへておもひみたれぬをみなへし
うき世をそむく草のいほりにとあり(こ)たみ
はさもありぬへしとおもひゆるしてかへりぬふ
みなとわさとやらんはさすかにうゐ〳〵しく
ほのかにみしさまはわすれす物思らんすち何

31ウ

事としらねと哀なれは八月十よ日のほと
にこたかゝりのつゐてにおはしたりれいの
あまよひい出てひとめ見しよりしつ心なくて
な〇(ん)との給へりいらへ給へくもあらねはあま
君まつちの山となんみ給ふ(る)といひ出し給・
たいめんし給へるにも心くるしきさまにて物し

32オ

たまふときゝ侍し人の御うへなんのこりゆか
しく侍何事も心にかなはぬ心ちのみし侍
れは山すみもし侍らまほしき心ありなからゆる
い給ましき人〳〵におもひさはりてなんすくし

32ウ

侍よに心ちよけなるひとのうへはかくくした
る人の心からにやふさはしからすなん物おもひ給
らん人におもふことをきこえはやなといと心
とゝめたるさまにかたらひ給・心ちよけなら
ぬ御ねかひはきこえかはし給はんにつきなから
ぬさまになん〇(見え)侍れとれいの人にてあらしと
いとうたゝあるまて世をうらみ侍めれはのこり
すくなきよはひの人たにいまはとそむき
侍ときはいと物心ほそくおほえ侍し物を
よをこめたるさかりにてはつゐにいかゝと

33オ

なむ見給へ侍とおやかりていふ・いりてもなさ
けなし猶いさゝかにてもきこえ給へかゝる御

すまゐはすゝろなることもあはれしるこそ
よのつねのことなれなとこしらへて〇いへと人
にものきこゆらんかたもしらす何事もいふ
かひなくのみこそといとつれなくてふし給
へり・まらふとはいつらあな心う秋をちきれる
はすかし給にこそありけれなとうらみつゝ

松むしのこゑをたつねてきつれともまた
おきはらの露にまとひぬあないとをしこれ

33ウ

をたにとせむれはさやうによついたらんこと
いひいてんもいと心うくまたいひそめては
かやうのおり〳〵にせめられんもむつかしうお
ほゆれはいらへをたにし給はねはあまりい
ふかひなくおもひあへり・あま君はやうは
いまめきたる人にそける名こりなるへし

秋の野の露わけきたるかり衣むくら
しけれるやとにかこつなとなんわつらはし
かりきこえ給めるといふをうちにも猶

かく心よりほかによにありとしられはしむる

34オ

をいとくるしとおほす心のうちをはしらて
おとこ君をもあかすおもひいてつゝ恋わたる
人〳〵なれはかくはかなきつゐてにもうちかた
らひきこえ給へらんに心よりほかによにうし
ろめたくは見え給はぬ物をよのつねなるす
ちにおほしかけすともなさけなからぬほとに
御いらへはかりはきこえ給へかしなとひきうこ
かしつへくいふさすかにかゝるこたいの心ともに
はありつかすいまめきつゝもしおれうたこの
ましけにわかやくけしきともはいとうしろめ

たくおほゆ・かきりなくうき身なりけりと
みはてゝしいのちさへあさましくなかくていかな
るさまにさすらふへきならんひたふるになき
物と人にみきゝすてられてもやみなはや
とおもひふし給へるに中将はおほかた物おも

34ウ

はしきことのあるにやいといたく打なけきつゝ
忍ひやかに笛ふきならしてしかのなく音に
なとひとりこつけはひまことに心ちなく
はあるまし過にしかたの思出らるゝにもな
か〳〵心つくしにいまはしめてあはれとおほすへ

きひとはたかたけなれは見えぬ山ちにもえ
おもひなすましくなんとうらめしけにて出
給なんとするにあま君なとあたらよを御
らんしさしつるとてゐさり出給へりなにかを
ちなるさとも心みは侍ぬれはといひす
さみていたくすきかましからんもさすかにひん
なしいとほのかに見えしさまのめとまりしは
かりつれ〳〵なる心なくさめにおもひ出つる
をあまりもてはなれおくふかなるけはひも
所のさまにあはすすさましとおもへはかへり

なんとするを・笛のねさへあかすいと〇おほえて

35オ

35ウ

ふかき夜の月をあはれとみぬ人や山のはち
かきやとにとまらぬとなまかたはなることを
かくなむとこえ給といふ心ときめきして

山のはに入まて月をなかめみんねやのいたま
もしるしありやとなといふに・このおほあ
ま君ふえの音を〇ほのかに本ニテシ〇聞つけたりけれ
はさすかにめてゝ出きたりこゝかしこうちし
はふきあさましきわなゝき声にて中〳〵む
かしの事なともかけていはすたれともお

もひわかぬなるへしいかてそのきんのことひ
き給へよこ笛は月にはいとおかしきものそ
かしいつらくそたちことゝりてまいれといふ
に・それなゝりとをしはかりにきけといかなる
所にかゝる人いかてこもりゐたらんさため
なき世そこれにつけて哀なる・はんしき
てうをいとをかしくふきていつらさらはとの
給むすめのあま君これもよきほとのすき

36オ

物にて・昔きゝ侍しよりもこよなくおほ
え侍は山かせをのみ聞なれにけるみゝからに

36ウ

やとていてや是はひかことになりて侍らんと
いひなからひく・いまやうはおさ〳〵なへての人
のいまはこのますなりゆくものなれは中々
めつらしくあはれにきこゆ・松風もいとよく
もてはやすふきあはせたる笛の音に月も
かよひてすめる心ちすれはいよ〳〵めてられ
てよひまとひもせすおきゐたり・をゝ(ゐ)なは
昔あつま琴をこそはこともなくひき侍しかと
いまの世にはかはりにたるにやあらん・この僧
都のきゝにくし念仏よりほかのあたわさなせ

37オ

そとはしたなめられしかは何かはとてひき侍ら
ぬなりさるはいとよくなることも侍りといひ
つゝけていとひかまほしとおもひたれは・いと
しのひやかにうちわらひていとあやしきこ

とをもせいしきこえ給けるそうつゐ(か)なこく
らくといふなる所には菩薩(サチ)なともみなか
かる事をして天人なともまひあそふとと
こそたうとかなれおこなひまきれつみうへ
きことかはこよひ聞侍らはやとすかをは(せ)・いと
よしとおもひていてとのもりのくそあつま

37ウ

とりてといふにもしはふきはたえす人〳〵は見
くるしとおもへと僧都をさへうらめしけにう
れへていひきかすれはいとをしくてまかせ
たりとりよせてたゝ今のふえの音をもた
つねすたゝをのか心をやりてあつまのしら
へをつまさはやかにしらふみなことものは声や
めつるをこれにのみめてたるとおもひてた
けふちちり〇は(リタンナチリ)ともわりなくふるめきたり
いとおかしういまのよにきこえぬことはこそは
ひき給けれとほむれはみゝほの〳〵しくかた

38オ

はらなる人にとひきゝて・いまやうのわかき
人はか〇やうなることをそこのまれさりける
こゝに月ころものし給めるひめ君かたちはい
ときよらに物し給めれともはらかゝる〇わさ
なとし給はすゐもれてなんものしたまふめ
るとわれかしこにうち〇わらひてかたるをあま
君なとはかたはらいたしとおほすこれにこ
とみなさめてかへり給ほとも山おろしふきて
きこえくる笛のねいとをかしうきこえてを
きあかしたるつとめて・よへはかた〳〵心みたれ

38ウ

侍しかはいそきまかて侍し
　わすられぬむかしのことも笛竹のつらきふし
にもねそなかれける猶すこしおほししるはかり
をしへなさせ給へしのはれぬへくはすき〳〵し
きまても何かはとあるをいとゝわひたるは涙
とゝめかたけなるけしきにてかきたまふ
　笛の音にむかしのこともしのはれてかへり

しほとも袖そぬれにしあやしく物おもひしら
ぬにやとまて見侍ありさまはおい人のと
はすかたりにきこしめしけんかしとあり・

39オ

めつらしからぬも見ところなき心ちして
うちをかれけんかし・おきの葉にをとらぬ
ほと〳〵にをとつれわたるいとむつかしくも
あるかな人の心はあなかちなるもの成けり
と見しりにしおり〳〵もやう〳〵おもひ出る
まゝになをかゝるすちのこと人にもおもひは
なたすへきさまにとくなし給てよゐて経な
らひてよみ給心のうちにもねんし給へり・
かくよろつにつけて世中をおもひ〇つれは
わかき人とておかしやかなることもことに

39ウ

なくむすほゝれたる本上なめりとおもふ
かたちの見るかひありうつくしきによろつ
のとかみゆるしてあけくれのみものにした

りすこしうちかたらひ給おりはめつらしく〇たき
物におもへり・九月になりてこのあま君
はつせにまうつとしころいと心ほそき身
に恋しき人のうへもおもひやまれさりし
をかくあらぬ人ともおほえ給はぬなくさめを
えたれはくはんおむの御しるしうれしとてかへ
り申たちてまうて給成けりいさたまへ

人やはしらむとするおなし仏なれとさやう
の所にをこなひたるなんしるしありて
よきためしおほかるといひてそゝのかした
つれと昔はゝきみめのとなとのかやうにいひ
しらせつゝたひ〳〵まうてさせしをかひなき
にこそあめれいのちさへ心にかなはすたくひ
なきいみしきめをみるはと〇心うきうちにも
しらぬ人にくしてさる道のありきをした
らむよとそらをそろしくおほゆ心こはき
さまにはいひもなさてこゝちのいとあしく

40オ

のみ侍れはさやうならんみちのほとにもいかゝ
なとつゝましくなんとの給ものをちはさも
したまふへき人そかしとおもひてしゐて
もいさなはす

はかなくて世にふる河のうき瀬にはたつね
もゆかし二もとの杉とてならひにましりたる
をあま君見つけてふたもとはまたもあひ
きたゆんと思ひたまふ人あるへしとた
はふれことをいひあてたるにむねつふれ
ておもてあかめ給へるもいとあひきやうつ
きうつくしけなり

ふる河の杉のもとたちしらねともすきにし
人によそへてそみることなることなきいらへ
をくちとくいふ・忍ひてといへとみな人したひ
つゝこゝには人すくなにておはせんを心くるし
かりて心はせある少将のあまさゑもんとて

40ウ

41オ

あるおとなしき人わらは斗そとゝめたり
けるみな出たちぬるをなかめ出てあさま
しき事をおもひなからもいまはいかゝはせん
とたのもし人におもひふひと独ものしたはぬは

41ウ

心ほそくもあるかなといとつれ〳〵なるに・
中将の御ふみあり御らんせよといへと聞も
いれ給はすいとゝ人も見えすつれ〳〵ときし
かたゆくさきを思ひく〇し給くるしきまて
もなかめさせ給かな御こうたせたまへとい
ふいとあやしくこそはありしかと〇の給へ
とうたむとおほしたれははむとりにやりて
われはとおもひてせんせさせたてまつり
たるにいとこよなけれはまたてなをし
てうつあまうへとくかへらせ給はなんこの御
こ見せたてまつらむかの御こそいとつよか
りし僧都の君はやうよりいみしくこの

42オ

ませたまひてけしうはあらすとおほし
たりしをいときせいたいとくになりて
さし出てこそうたさらめ御こにはまけしかし
ときこえ給しにつゐにそうつなんふたつ
まけ給しきせいか碁にはまさらせ給へき
なめりあないみしとけうすれはさた過たる
あまひたひのみつかぬにものこのみするに
むつかしきこともしそめてけるかなとおもひて

42ウ

心ちあしとてふし給ぬ・とき〳〵はれ〳〵しく
もてなしておはしませあたら御身をいみしく
しつみてもてなさせ給ふこそくちおし
く玉にきすあらん心ちし侍れといふ・夕暮
の風の音も哀なるにおもひ出ること
おほくて
　心には秋の夕をわかねともなかむる袖に
露そみたるゝ月さし出ておかしきほとにひ
るふみありつる中将おはしたりあなう

たてこはなそとおほえたまへはおくふかく
いりたまふをさもあまりにもおはします
かな御心さしのほともあはれまさるおりに
こそ侍〳〵めれほのかにもきこえ給はんことも
きかせ給へしみつかんことのやうにおほし
めしたるこそなといふにいとうしろめた
くおほゆおはせぬよしをいへとひるのつか
ひのひとゝころなととひきゝたるなるへ
し・いと事おほくうらみて御こゑもきゝ
侍らしたゝけり（ち）かくてきこえんことをきゝ
にくしともおほしことはれとよろつにいひ

43オ

侘ていと心うくところにつけてこそ物のあ
はれもまされあまりかゝるはなとあはめつゝ
　山里の秋の夜ふかきあはれをも物おもふ人
はおもひこそしれをのつから御心もかよひぬ
へきをなとあれは・あま君おはせてまきら
はしきこゆへき人も侍らすいとよつかぬやう
ならんとせむれは
　うき物とおもひもしらて過す身をもの思ふ
人とひとはしりけりわさといふともなき
をきゝてつたへきこゆれはいとあはれと

43ウ

おもひてなをたゝいさゝかいてたまへと
きこえうこかせとこの人〳〵をわりなきまて
うらみ給・あやしきまてつれなくそ見え給や
とていりてみれは〇かりそめにもさしのそき
給はぬおい人の御かたに入給にけりあさまし
く思ひてかくなんときこゆれはかゝる所に
なかめ給らん心のうちのあはれにおほかた
のありさまなともなさけなかるましき人
のいとあまりおもひしらぬ人よりもけに
もてなし給めるこそそれも物こりしたまへる
か猶いかなるさまに世を恨ていつまてお

44オ

44ウ

はすへき人そなとありさまとひていとゆ
かしけにのみおほいたれとこまかなることはい
かてかはいひきかせんたゝしりきこえたま
ふへき人のとしころはうと〳〵しきやうにて
すくし給ひしをはつせにまうてあひ給て
たつねきこえ給つるとそいふ・ひめ君は
いとむつかしとのみきくおい人のあたりにう
つふし〳〵ていもねられすよひまとひはえ
もいはすおとろ〳〵しきいひきしつゝまへにも

うちすかひたるあまともふたりしてをと
らしといひきあはせたりいとおそろしくこ
よひこの人〳〵にやくはれなんとおもふも
おしからぬ身なれとれいの心よはさはひとゆ
はしあやうかりてかへりきたりけんものゝやう
にわひしくおほゆこもきともにゐておは
しつれといろめきてこのめつらしきおと
このえんたちゐたまへるかたにかへりゐに

45オ

けりいまやくる〳〵とまちゐ給へれといと
はかなきたのもし人なりや・中将いひわつら

ひてかへりにけれはいとなさけなくうもれ
てもおはしますかなあたら御かたちをなとそ
しりてみなひと所にねぬ・よなかは〇りにや
なりぬらんと思ほとにあま君しはふきおほ
ほれておきにたりほかけにかしらつきはいと
しろきにくろき物をかつきて此君のふし給
へるをあやしかりていたちとかいふなる物かさる
わさするひたいに手をあてゝあやし是は誰
そとしうねけなる声にて見をこせたる
さらにたゝいまくひてんとするとそおほゆる

おにのとりもてきけん程はものおほえさり
けれは中〳〵心やすしいかさまにせんとおほ
ゆるむつかしさにもいみしきさまにていき
かへり人になりて又ありし色〳〵のうき

45ウ

46オ

事をおもひみたれむつかしともおそろしとも
物を思ふよしなましかは是よりもをそろし
けなるものゝ中にこそはあらましかとおもひ
やらる昔よりのことをまとろまれぬまゝに
つねよりもおもひつゝくるにいと心うくおや
ときこえけん人の御かたちも見たてまつらす

はるかなるあつまをかへる〳〵とし月をゆきて
たまさかにたつねよりてうれしたのもしと
おもひきこえしはらからの御あたりもおもはす
にてたえすきさるかたにおもひさため給へり
し人につけてやう〳〵身のうさをもなく
さめつへききはめにあさましくもてそこな
ひたる身をおもひもてゆけは宮をすこし
もあはれと思ひきこえけん心そいとけしから
ぬたゝこの人の御ゆかりにさすらへぬるそ
とおもへはこしまのいろをためしにちきり給

46ウ

47オ

しをなとておかしとおもひきこえけんとこよ
なくあきにたる心ちす・はしめよりうすきな
からものとやかに物したまひし人は此おり
かのおりなとおもひ出るそこよなかりける
かくてこそ有けれと聞つけられたてまつら
むはつかしさは人よりまさりぬへしさすかに此
よにはありし御さまをよそなからたにいつか
はみん〇するとおもふ猶わろの心やかくたに
おもはしなと心ひとつをかへさも〇うらして
鳥のなくをきゝていとうれしはゝの御こゑ

をまして聞たらんはいかならんとおもひあか
して心ちもいとあし・ともにてわたるへき人
もとみにこねは猶ふし給へるにいひきの人
はいとゝくおきてかゆなとむつかしきことゝも
をもてはやしておまへにとくきこしめせな
とよりきていへとまかなひもいと心つきなく
うたて見しらぬ心ちしてなやましくなんと

47ウ

ことなしひ給をしゐていふもいとこちた
し・けす〳〵しき法師はらなとあまたきて
僧都けふおりさせ給へしなとにはかには

とゝふなれは一品の宮の御ものゝけになや
ませ給ける山のさすみすほうつかまつら
せ給へと猶僧都まいり給はてはしるしな
しとて昨日ふたゝひなんめし侍し左大臣殿の
四位少将よへ夜更てなんのほりおはし〇て
きさいの宮の御ふみなと侍ければおりさ
せ給なりといとはなやかにいひなす・はつ
かしくともあひてあまになし給てよとも
いはんさかしら人すくなくてよきおりにこそ
とおもへはおきて心ちのいとあしくのみ侍を

48オ

僧都のおりさせ給へらむにいむことうけ侍
らんとなんおもひ侍をさやうにきこえ給へ
とかたらひ給へはほけ〳〵しくうちうなつく

48ウ

れいのかたにおはしてかみはあま君のみけつ
り給をこと人にてふれさせんもうたてお
ほゆるにてつからはたえせぬ事なれはた
たすこしときくたして親にいま一たひかう
なからのさまを見えすなりなんこそ人
やりならすいとかなしけれいたくわつらひし
けにやかみもすこしおちほそりにたる心ち

すれと何はかりもおとろへすいとおほくて
六尺はかりなるすゑなとそうつくしかりける
すちなともいとこまかにうつくしけなり
かゝれとてしもとひとりこちゐ給へり・くれ
かたに僧都物したまへり南おもてはらひ
しつらひてまろなるかしらつきともゆき
ちかひさはきたるもれいにかはりていと
おそろしき心ちす・はゝの御かたにまいり給
ていかにそ月ころはなといふひんかしの御
かたはものまうてし給にきとかこのおは

49オ

せしひとはなを物したまふやな〇(ん)とゝひ給(ふ)
しかこゝにとまりてなん心ちあしとこそ
物し給ていむことうけたてまつらんとのた
まひつるとかたるたちてこなたにいまし
てこゝにやおはしますとてきちやうのもとに
つゐゝ給へはつゝましけれとゐさりよりて
いらへし給ふ・ふいにて見たてまつりそ
めてしもさるへき昔のちきりありけるに
こそとおもふ給へて御いのりなともねんこ
ろにつかうまつりしを法師は其事とな

49オ

くて御ふみきこえうけ給はらんもひんなけ
れはしねんになんおろかなるやうになり
侍ぬるいとあやしきさまに世をそむき
給へる人の御あたりにいかておはしますらん
とのたまふ・世中には(侍)らしとおもひたち侍し
身のいとあやしくていまゝて侍を心うしとおも

50オ

ひは(侍)ん物からよろつにせさせたまひける
御心はへをなんいふかひなき心ちにもおもふたま
へしらるゝをなをよつかすのみつゐにえと
まるましくおもふたまへらるゝをあまになさ

50ウ

せ給ひてよ世中に侍ともれいの人にてな
からふへくも侍らぬ身になんときこえ給・また
いとゆくさきとをけなる御ほとにいかてかひ
たみちにしかはおほしたらんかへりてつみある
事なりおもひたちて心をゝこし給ほと
はつよくおほせと年月ふれはをんなの御身
といふものいとたい〳〵しき物になんとの
給へは・おさなく侍しほとよりものをのみお
もふへきありさまにておやなとも尼に
なしてや見ましなとなん思のたまひしまし

てすこ物おもひしり侍て後はれいの人
さまならてのちの世をたにと思ふ心ふかく

51オ

侍しをなくなるへきほとのやう〳〵ちかくなり
侍にや心ちのいとよはくのみなり侍を猶いか
てとてうちなきつゝのたまふ・あやしくかゝる
かたちありさまをなとてみをいとはしくおも
ひはしめ給ひけんものゝけもさこそいふなり
しかとおもひあはするにさるやうこそあら
め今まてもいきたるへき人かはあしきもの
の見つけそめたるにいとおそろしくあやう

き事なりとおほしてとまれかくまれおほ
したちての給を十ほうのいとかしこくほめ給
ことなりほうしにてきこえかへすへきことなら
す御いむことはいとやすくさつけたてま
つるへきをきうなることにてまかてたれは
こよひかの宮にまいるへく侍りあすよりやみ
すほうはしまるへく侍らん七日はてゝまかてんに
つかまつらむとのたまへは・かの尼君お
はしなはかならすさまたけてんと〇くちおしく

51ウ

てみたり心ちのあしかりしほとにしたるやう

にていとくるしく侍れははおもくならはいむ
ことかひなくや侍らんなをけふはうれしき
おりとこそおもふ給へつれとていみしくなき
給へは・ひしり心にいと〳〵をしくおもひて夜
や更侍りぬらん山よりをり侍ことむかしは
ことゝもおもふ給へられさりしをとしのおふる
まゝにはたへかたく侍けれはうちやすみて
内にはまいらんとおもひ侍をしかおほしい
そくなれはけふつかうまつりてんとの給に
いとうれしくなりぬはさみとりてくしのはこの

ふたさし出たれはいつらたいとこたちこゝにと
よふはしめ見つけたてまつりしふたりなから
ともにありけれはよひ入て御くしおろしたて
まつれといふけにいみしかりし人の御あり
さまなれはうつし人にてはよにおはせんも

52オ

52ウ

うたてこそあらめとこのあさりもことはりに
おもふにきちやのかたひらのほころひより
御かみをかきいたし給へるかいとあたらしくお
かしけなるになんしはしは(は)さみをもてやす
らひける・かゝるほと少将のあまはせうと

のあさりのきたるにあひてしもにゐたり(る)
さゑもんはこのわたくしのしりたる人にあへ
しらふとてかゝる所につけてはみなとり〳〵
に心よせのひと〳〵めつらしくて出きたるにはか(は)
なきことしけるみいれなとしけるほとに
こもきひとりしてかゝることなんと少将のあ
まにつけたりけれはまとひてきてみるに
わか御うへのきぬけさなとをことさらはかり
とてきせたてまつりておやの御かたお
かみたてまつり給へといふにいつかたともしら
ぬほとなんえ忍ひあへ給はてなき給に

53オ

53ウ

ける・あなあさましやなとかくあふなきわさ
は○(せ)させ給うへかへりおはしましてはいかなることを
の給はせんといへとかはかりにしそめつるをい
ひみたるとも物なしと思ひて僧都いさ
め給へはよりてもえさまたけす流転三
ゐ(界)中なといふにもたちはてゝしものをと思
ひ出るもさすか成けり御くしもそきわつらひ
てのとやかにあま君たちしてなをさせ給
へといふひたひは僧都そゝき給ふかゝる

御かたちやつし給ひてくひ給ななとたうと
きことゝもと○(き)きかせ給とみにせさすへくも
なくみないひしらせ給へることをうれしくも
しつるかなとこれのみそいけるしるしあり
ておほえ給けるみな人〳〵いてしつまりぬ・
よるの風の音にこの人〳〵は心ほそき御
すまゐもしはしのことそいまいとめてたく
なり給なんとたのみきこえつる御身を

54オ

かくしなさせ給てのこりおほかる御よのすゑ
をいかにせさせ給はんとするそおいおとろへ
たる人たに今はかきりとおもひはてられて
いとかなしきわさに侍といひしらすれとなを
たゝいまは心やすくうれし世にふへき物とは
思かけすなりぬるこそはいとめてたきこと
なれとむねのあきたる心ちそしたまひける・
つとめてはさすかに人のゆるさぬ事なれは
かはりたらんさま見えんもいとはつかしくかみの
すそのにはかにおほとれたるやうにしとけ
なくさへそかれたるをむつかしきことゝもいはて
つくろはん人もかなと何事につけてもつゝ
ましくてくらう〇なしておはすおもふことを人
にいひつゝけんことのはゝもとよりたにはか〳〵
しからぬみをまいてなつかしくことはるへき人
さへなけれはたゝすくりにむかひておもひあ

54ウ

55オ

まるおりはてならひをのみたけきことにて
かきつけ給ふ
　なきものに身をも人をも思ひつゝすてゝ
し世をそさらに捨つるいまはかくてかきり
つるそかしとかきても猶みつからいとあはれとみ給
　かきりそとおもひなりにしよの中をかへ
す〳〵もそむきぬる哉おなしすちのことを
とかくかきすさひゐ給へるに中将の御ふみ
あり物さはかしくあきれたる心ちしあへるほ
とにてかゝることなんといひてけりいとあへな
しと思ひてかゝる心のふかくありける人
なりけれははかなきいらへをもしそめしと思
はなるゝなりけりさてもあへなきわさかな
いとおかしく見えしかみのほとをたしかにみ
せよとひとよもかたらひしかはさるへからん
おりにといひしものをといと口おしくて

55ウ

56オ

たちかへり・きこえんかたなきは
　きしとをくこきはなるらむあま舟にのり
をくれしといそかるゝ哉れいならすとりて
見給物のあはれなるおりにいまはとおもふ
も哀なる物からいかゝおほさるらんいとはかな
きものゝはしに
　心こそうきよのきしをはなるれと行ゑも
しらぬあまのうきゝをとれいの手ならひ
にし給へるをつゝみてたてまつるかきう
つしてたにこそとのたまへと中〳〵かき

そこなひ侍なんとてやりつめつらしきに
もいふかたなくかなしくなんおほえける・物
まうての人かへり給て思さはきたまふ
ことかきりなしかゝる身にてはすゝめきこ
えんこそはとおもひなし侍れとのこりおほ
かる御身をいかてへ給はんとすらんをのれ
はよに侍らんことけふあすともしりかたき

56ウ

にいかてうしろやすく見をきたてまつらん
とよろつに思ふたまへてこそ仏にもいのり
きこえつれとふしまろひつゝいといみしけ

57オ

におもひ給へるにまことのおやのやかてから
もなき物と思ひまとひ給けんほとをし
はかるそまついとかなしかりけるれいのい
らへもせてそむきゐたまへるさまいとわ
かくうつくしけれはいと物はかなくそおはし
ける御心なれとなく〳〵御そのことなとい
そき給にひ色はてなれしことなれはこう
ちきけさなとしたりある人〳〵もかゝる色
をぬひきせたてまつるにつけても〇おほ
えすうれしき山さとのひかりとあけくれ

みたてまつ〇る物をくちおしきわさかなと
あたらしかりつゝ僧都をうらみそしりけり・
一品の宮の御なやみけにかのてしのいひしも

57ウ

しるくいちしるきこととともありてをこた
らせたまひにけれはいよ〳〵いとたうとき
ものにいひのゝしる名こりもおそろしと
てみすほうのへさせ給へはとみにもえかへり
いらてさふらひ給に雨なとふりてしめや
かなるよめしてよゐにさふらはせ給日ころ
いたくさふらひこそしたる人はみなやすみな

58オ

としておまへに人すくなにてちかくおきたる
人すくなきおりにおなし御ちやうにおはし
ましてむかしよりたのませ給中にも此たひ
なんいよ〳〵のちのよもかくこそはとたのも
しきことまさりぬるなとのたまはす・世中
にひさしく侍ましきさまに仏なともをしへ
給へることゝも侍うちにことしらいねんす
くしかたきやうになん侍けれは仏もまき
れなくねんしつと侍らんとてふかくこもり
侍をかゝるおほせことにてまかり出侍にし

なとけいし給御ものゝけのしうねきこと
さま〳〵になのるかをそろしき事なとの給
つゐてに・いとあやしくけうのことをなんみた
まへしこの三月にとしおいて侍はゝの願あり
て瀬にまうてゝ侍しかへさの中やとりに宇
治の院といひはゐる所にまかりやとりしを
かくのこと人すまてとしへぬるおほきなる
所はよからぬ物かならすかよひすみておもき
ひやうさのためあしきことゝもやと思ひ
たまへしもしるくとてかの見つけたりし

58ウ

事ともをかたりきこえ給けにいとめつらしか
なることかなとてちかくさふらふ人〳〵みなね
いりたるをおそろしくおほまれておとろ
かさせ給大将のかたらひ給宰相のきみ
しもこの事をきゝけりおとろかさせ給ける
人〳〵は何ともきかす僧都をちさせたまへ

59オ

る御けしきを心もなきことけいしてけり
とおもひてくはしくもそのほとのことをはい
ひさしつ・その女人このたひまかりいて侍つる
たよりにをのに侍つるあまともあひとひ侍らん

とてまかり〇たりしになく〳〵出家のほいふか
きよしねん比にかたらひ侍しかはかしらおろ
し侍にきなにかしかいもをとこゑもんのか
みのめに侍しあまなん失にしをんなこの
かはりにとおもひよろこひ侍りてすいふん
にいたはりかしつき侍けるをかくなりにたれは
うらみ侍なりけにそかたちはいとうるはしく
けちゆにておこなひやつれんもいとおし
けになん侍し何人にか侍けんとものよくいふ
僧都にてかたりつゝけ申給へは・いかてか

さる所によき人をしもとりもてゆきけん
さりとも今はしられぬらんなとこの宰相

59ウ

60オ

の君そとふ・しらすさもやかたらひ侍らん
まことにやんことなき人ならは何かかくれ
も侍らしをやゐ中人のむすめもさるさま
したるこそは侍らめりうのなかより仏む
まれ給はすはこそ侍らめたゝ人にてはいと
つみかろきさまの人になん侍けるなとき
こえ給・その比かのわたりにきえうせにけん
人をおほしいつこのおまへなる人もあね

君のつたへにあやしくてうせたる人とは聞
をきたれはそれにやあらんとはおもひけれ
とさためなきことなり僧都もかの人世
にある物ともしられしとよくもあらぬかた
きたちたる人もあるやうにおもひけて
かくし忍ひ侍をことさまのあやしけれはけ
いし侍なりとなまかくすけしきなれは人
にもかたらす・みやはそれにもこそあれ大将
にきかせはやとこの人にそのたまはすれ

60ウ

といつかたにもかくすへき事をさためて

さならんともしらすなからはつかしけなる人に
うち出のたまはせんもつゝましくおほして
やみにけり・ひめ宮をこたりはてさせ給て
僧都ものほり給ぬかしこにより給へれは
いみしくうらみて中〳〵かゝる御ありさまに
てつみもえぬへきことをのたまひもあはせ
すなりにけることをなんいとあやしきなと
のたまへとかひもなし・今はたゝ御をこなひ
をしたまへおいたるわかきさためなき世な
りはかなき物におほしとりたるもことはりなる

御みをやとの給にもいとはつかしくなんおほし
ける・御ほうふくあたらしくしたまへとてあ
やうすものきぬなといふものたてまつり
をきたまふなにかし侍らんかきりはつかうま
つりなん何かおほしわつらふへきつねの

よにおひ出てせけんのゑいくはにねかひ
まつはるゝかきりなんところせくすてかたく
われも人もおほすへかめるかゝるはやしの中
にをこなひつとめたまはん身は何事
かはうらめしくもはつかしくもおほすへきこの

あらんいのちは葉のうすきかことしといひし
らせて松門にあかつきいたりて月〇徘徊す
と法師なれと〇よし〳〵しくはつかしけなる
さまにてのたまふことゝもを思ふやうにも
いひきかせ給かなときゝゐたり・けふはひね
もすにふく風の音もいと心ほそきにおはし
たる人もあはれ山ふしはかゝる日にそねは
なかるなるかしといふを聞て我もいまは
山ふしそかしことはりにとまらぬなみたな
りけりとおもひつゝはしのかたにたち出て

みれははるかなる軒はよりかりきぬすか

61オ

61ウ

62オ

62ウ

た色〳〵にたちましりてみゆ山へのほる
人なりとてもこなたの道にはかよふ人も
いとたまさかなりくろ谷とかいふかたより
ありく法師の跡のみまれまれは見ゆる
をれいのすかたみつけたるはあひなくめつ
らしきに此うらみわひし中将成けりかひ
なきこともいはんとてものしたりけるを紅
葉のいとおもしろくほかのくれなゐにそめ
ましたる色〳〵なれは入くるよりそ物あは
れなりけるこゝにいと心ちよけなる人を
見つけたら〇はあやしくそおほゆへきなと
おもひて・はとまありてつれ〳〵なる心ち
し侍にも紅葉もいかにとおもふ給へてなん
猶立かへりたひねもしつへきこのもとにこ
そとてみいたしたまへり・あま君れいの涙
もろにて
　木からしの吹にし山のふもとにはたちかく〇

63オ

へきかけたにそなきとのたまへは
　まつ人もあらしと思ふ山さとのこすゑを
見つゝ猶そすきうきいふかひなき人の御こ
とを猶つきせすの給てさまかはり給へ
らんさまをいさゝか見せよと少将のあまに
のたまふそれをたにちきりしるしにせ
よとせめたまへはいりてみるにことさらに
も人に見せまほしきさましてそおはする
うすにひ色のあやなかにはくはんさうなと
すみたる色をきていとさゝやかにやうた
いをかしくいまめきたるかたちにかみはい
つへのあふきをひろけたるやうにこちたき
すゑつきなりこまかにうつくしきおもやう
のけさうをいみしくしたらんやうにあかくに
ほひたりをこなひなとをしたまふなを
すゝはちかきちやうにうちかけて経に心

63ウ

64オ

をいれてよみたまへりさまゑにもかゝまほ
しゅうちみることになみたのとめかたき
心ちするをまいて心かけ給はんおとこ〇(は)いかに
見たてまつり給はんと思てさるへきおり
にやありけんさま(う)しのかけかねのもとにあ
きたるあなをおしへてまきるへききちやう

なとひきやりたりいとかくはおもはすこ
そありしかいみしくおもふさまなりけるひと
をとわかしたらんあやまちのやうにおしくゝや
しくかなしけれはつゝみもあわ(へ)すものくるお
しきまてけはひもきこえぬへけれはのき
ぬかはかり〇(の)さましたる人をうしなひてたつね〇(ぬ)
人ありけんやまたその人かの人のむすめ
なんゆくゑもしらすかくれにたるもしはも
のえんしして世をそむきにけるなとを
のつからかくれなかるへきをなとあやしく

64ウ

65オ

返々おもふあまなりともかゝるさま〳〵(し)たらん
人はうたてもおほえしなと中〳〵見とこ
ろまさりて心くるしかるへきを忍ひたる
さまになをかたらひとりてむとおもへは
まめやかにかたらふ・よのつね〇(の)さまにはおほ
しはゝかることもありけんをかゝるさまに
なりたまひにたるなん心やすくきこえ
つへく侍さやうにをしへきこえ給へきし
かたのわすれかたくてかやうにまいりくるに
またいまひとつ心さしをそへてこそなとの

給・いとゆくすゑ心ほそくうしろめたきあり
さまに侍めるにまめやかなるさまにおほ
しわすれすとはせ給はんいとうれしくこそ
おもふたまへをかめはへらさらんのちなんあ
はれにおもふたまへらるへきとてなき給
に・此あま君もはなれぬ人なるへしたれ
ならんと心えかたし・ゆくすゑの御うしろみは

65ウ

いのちもしりかたくたのもしけなきみ
〇(な)れとさきこえそめ侍なはさらにかはり侍ら
したつねきこえ給へき人はまことに

ものしたまはぬかさやうのことのおほつかな
きになんはゝかるへき事には侍らねと
なをへたてある心ちし侍へきとの給へは・人
にしらるへきさまにて世に経たまはゝさも
やたつねいつる人も侍らん今はかゝるかた
に思かきりつるありさまになん心のおも
むけもさのみみえ侍をなとかたらひ給・こ
なたにもせうそこし給へり

おほかたの世をそむきける君なれといとふ
によせて身こそつらけれねんころにふかくき

66オ

こえ給ふことなとおほくいひつたふはらから
とおほしなせはかなきよの物かたりなと
もきこえてなくさめんなといひつゝく・心ふ

66ウ

かゝらん御物かたりなときゝわくへくもあらぬ
こそくちおしけれといらへてこのいとふにつ
けたるいらへはし給はすおもひよらすあ
さましきこともありしみなれはいとうと
ましすへてくち木なとのやうにて人に
すてられてやみなんともてなしたまふされは
月ころたゆみなくむすほゝれ物(を)のみおほ

したりしもこのほいのことし給てのちより
すこしはれ〳〵しくなりてあま君とはかな
くたはふれもしかはしこうちなとしてそあ(か)る
しくらし給おこなひもいとよくしてほく(け)
る経はさらなりことほうもんなともいとおほ
くよみ給・雪深くふりつみ人めたえたる比そ
けにおもひやるかたなかりける・としもかへり
ぬ春のしるしも見えすこほりわたれる水
の音せぬさへ心ほそくて君にそまとふそ(と)
の給ひし人は心うしと思はてにたれと猶そ

67オ

のおりなとの事はわすれす
　かきくらす野山の雪をなかめてもふり
にしことそけふもかなしきなとれいのなくさめ
のてならひををこなひのひまにはし給われ
よになくてとしへたゝりぬるをおもひいつる
人もあらんかしなと思出るときもおほかり・
わかなをおろそかなるこにいれて人のも
てきたりけるをあま君みて
　山里の雪まのわかなつみはやし猶おひ
さきのたのまるゝかなとてこなたにたて
まつれ給へりけれは
　雪ふかき野辺のわかなもいまよりは君か
ためにそとしもつむへきとあるをさそお
ほすらむとあはれなるにもみるかひあるへき
御さまと思はましかはとまめやかにうちない
給・ねやのつまちかきこうはいの色もかもかは

67ウ

らぬを春やむかしのとこと花よりも是に
心よせのあるはあかさりし匂ひのしみにける
にやこやにあかたてまつらせ給けしう(ら)の
あまのすこしわかきかあるめし出て花をおら
すれはかことかましくちるにいとゝにほひくれは
　袖ふれし人こそ見えね花のかのそれかと匂
ふ春の明ほのおほあま君のまこの紀のかみ
なりけるか此比のほりてきたり三十はかり
にてかたちきよけにほこりかなるさまし
たりなにことかこそおととしなとゝふに
ほけ〳〵しきさまなれはこなたにきていと
こよなくこそひかみ給けれあはれにも侍哉
名残なき御さまをみたてまつることかたくて
とをきほとに年月をすくし侍よおやたち
物し給はて後(のち)はひと所をこそ御かはりに
思きこえ侍れひたちのきたのかたをはを

68ウ

69オ

とつれきこえ給やといふはいもをとなるへし・
とし月にそへてはつれ〳〵にあはれなる事
のみまさりてなんひたちはいとひさしくを
とつれきこえ給はさめりえまちつけ給ま
しきさまになん見えたまふとの給に・わかお
やのなとあいなくみゝと〇まるに・又いふやう
まかりのほりて日ころになり侍ぬるをおほ
やけことのいとしけくむつかしくのみ侍に

69ウ

かゝつらひてなんきのふもさふらはんとおもふ
たまへしを右大将とのゝ宇治におはせし
御ともにつかうまつりて故八の宮のすみ
たまひし所におはして日くらしたまひし
故宮の御むすめにかよひ給しをまつ一とこ
ろは一とせうせ給にきその御をとうと又
忍ひてすゑたてまつり給へりけるを
去年の春又うせ給にけれはその御はて・
のわさせさせたまはんことかの寺の律師

になんさるへきことのたまはせてなにかし

70オ

もかの女のさうそく一くたりてうしは侍るへき
をせさせたまひてんやをらすへきもの〇はいそ
きせさせ侍なんといふをきくにいかてかは
あはれならさらん人やあやしとみんとつゝ
ましうておくにむかひてゐたまへり・あま君
かのひしりのみこの御むすめはふたり〇ときゝし
を兵部卿の宮の北のかたはいつれそとのた
まへは・この大将とのの御のちのはをとりはら
なるへしこと〳〵しくももてなし給はさりける
をいみしくかなしひ給なりはしめのはたいみ

しかりきほと〳〵出家もし給つへかりき
かしなとかたる・かのわたりのしたしき人成けり
と見るにもさすかおそろし・あやしくやうの
物とかしこにてしもうせ給ひけることきのふ
もいとふひんには侍りしかな河ちかき所

70ウ

にて水をのそきたまひていみしくなき
給きうへにのほり給てはしらにかきつけ
給し
　見し人はかけもとまらぬ水のうへにおちそふ
なみたいとゝせきあへすとなん侍しことにあらはし

71オ

ての給ふことはすくなけれとたゝけしきには
いと哀なる御様(御イ)になん見えたまひしをん
なはいみしくめてたてまつりぬへくなんわかく
侍し時よりいうにおはしますとみたてまつりし
みにしかは世中のいちの所も何とも思ひ侍
らすたゝ此とのをたのみきこえさせてなん
すくし侍ぬるとかたるに・ことにふかき心もなけ
なるかやうの人たに御ありさまを〇見(はイ)しり
にけりとおもふ・あま君ひかる君ときこえ
けんこゐんの御ありさまにはえならひ給はし

71ウ

とおほゆるをたゝいまのよにこの御そうそめ
てられ給ふなる右大臣殿とゝのたまへはそ
れはかたちもいとうるはしうきよらにすう
とくにてきはことなるさまそし給へる兵部卿
の宮そいといみしくおはするやをんなにて
なれつかうまつらはやとなんおほえ侍なと
をしへたらんやうにいひつゝく・あはれ(ママ)にもお
かしくもきくに身のうへも此世のことゝも
おほえすとゝこほることなくかたりをきて出
ぬ・わすれ給はぬにこそはとあはれとおもふ

72オ

にもいとゝはゝ君の御心のうちおしはからるれ
と中〳〵いふかひなきさまを見えきこえた
てまつらんはなをいとつゝましくそありける・
かの人のいひつけしことなとそめいそくを見
るにつけてもあやしくめつらかなる心ちす
れとかけてもいひ出られすたちぬひな
とするをこれ御らんしいれよ物をいとうつ
くしくひねらせ給へはとてこうちきのひとへ

たてまつるをうたておほゆれは心ちあし
とて手もふれすふし給へりあま君いそく

ことをうち捨ていかゝおほさるゝなと思み
たれ給ふくれなゐにさくらのおりものゝうち
きかさねておまへにはかゝるをこそたてま
つらすへけれあさましきすみそめなりやと
いふ人あり

あま衣かはれる身にやありしよの形見に
袖をかけてしのはんとかきていとをしくな
くも成なんのちに物のかくれなきよなりけ
れはきゝあはせなとしてうとましきまて
かくしけるとやおもはんなとさま〳〵思ひ

つゝ過にしかたのことはたえてわすれ侍にしを
かやうなることをおほしいそくにつけてこそ
ほのかに哀なれとおほとかにの給・さりとも
おほし出ることはおほからんをつきせすへたて

72ウ

73オ

たまふこそ心うせれこゝにはかゝるよのつねの
色あひなとひさしくわすれにけれはなを〳〵
しく侍につけてもむかしの人あらましかは
なとおもひいて侍しかあつかひきこえ給け
む人よにおはすらんやかくなくなしてみ侍し
たになをいつこにあらんそことたにたつね

きかまほしくおほえ侍をゆくゑしらて思き
こえ給人〳〵侍らんかしとの給へは・見しほと
まてはひとりは物し給きこの月ころうせや
したまひぬらんとてなみたのおつるをま
きらはして中〳〵おもひいつるにつけて
うたて侍れはこそえきこえいてねへたては
何事にかのこし侍らんとことすくなにの給
ひなしつ・大将はこのはてのことなとせさせ
給てはかなくてもやみぬるかなと哀におほ
すかのひたちのこともはかうふりしたるは蔵

73ウ

74オ

人になしわか御つかさのそうになしなといた
はり給けりわらはなるか中にきよけな
るをはちかくつかひならさんとそおほしたり
ける・雨なとふりてしめやかなる夜きさ
いの宮にまいり給へり御まへのとやかなる
由(日)にて御物かたりなときこえ給つゐてに
あやしき山さとにとしころまかりかよひみ給
へしを人のそしり侍しもさるへきにこそは
あらめたれも心のよるかたのことはさなんある
と思たまへなしつゝ猶時々見たまひしを

74ウ

所のさゐ(さか)にやと心うく思ふたまへなりにし
後はみちもはるけき心ちし侍てひさしく
物し侍らぬをさいつころものゝたよりにまかり
てはかなき世のありさまとりかさねておも
ふたまへしにことさらたうしんをゝこすへ
くつくりをきたりけるひしりのすみかと
なんおほえ侍しとけいし給に・かのことおほ
し出ていと〳〵をしけれはそこにはをそろ
しき物やすむらんいかやうにてかかの人はな
くなりにしとゝはせ給を猶うちつゝきたる

75オ

をおほしよるかたと思ひてさも侍らんさやう
の人はなれたるところはよからぬものなん
かならすすみつき侍をうせ侍にしさまもいと
あやしく侍とてくはしくはきこえ給はす・なを
かく忍ふるすちをきゝあらはしけりと
おもひ給はんかいとをしくおほされみやのも
のをのみおほして其比はやまひにもなり給し
をおほしあはするにもさすかに心くるしく
てかた〳〵にくちいれにくき人のうへとおほ
しとゝめつこ宰相に忍ひて大将かのひと

75ウ

のことをいとあはれと思てのたまひしにいと
をしくてうち出つへかりしかとそれにもあらさら
む物ゆへとつゝましくてなんきみそこと〳〵

きゝあはせけるかたはならんことはとりかく
してさることなんありけるとおほかたの物か
たりのつゐてにそうつのいひしこと
かたれとの給はす・御まへにたにつゝませ給はん
ことをましてこと人はいかてかときこえさ
すれと・さま〳〵なることにこそまたまろはい
とおしき〇とそあるやとの給はするも心えて

76オ

おかしとみたてまつる・たちよりて物かたり
なとし給つゐてにいひいてたりめつらかに
あやしといかてかはおとろかれ給はさらん宮の
とはせ給しもかゝることをほのおほしよりてな
りけりなとかのたまはせはつましきとつら
けれと我もはしめよりありしさまの事き
こえそめさりしかはきゝてのちもなをゝこ
かましき心ちして人にすへてもらさぬをな
か〳〵ほかにはきこゆることもあらんかしうつゝの
人々のなかに忍ふることたにかくれある世中

76ウ

かはなとおもひいりてこの人にもさなんあ
りしなともあかし給はんことはなをくちをも
き心ちして・なをあやしとおもひし人のこと
にゝてもありける人のありさまかなさて
そのひとはなをあらんやとのたまへは・かのそ
うつの山より出し日なんあまになしつるいみ
しくわつらひしほとにもみな人おしみてせ
させさりしをさうしみのほいふかきよしをいひ
てなりぬるとこそは侍なりしかといふとこ
ろもかはならすその比のありさまとおもひ

77オ

あはするにたかふゝしなけれはまことにそれ
とたつねいてたらんいとあさましき心地
もすへきかないかてかはたしかにきくへき
おりたちてたつねありかんもかたくなし
とや人のいひなさん又かの宮もきゝつけ
たまへらんにはかならすおほしいてゝおもひ

いりにけんみちもさまたけ給てんかしさて
さなのたまひそなときこえをき給けれ
はにや我にはさることなんきゝしとさるめ
つらしきことをきこしめしながらのたまはせ

77ウ

ぬにやありけん宮もかゝつらひ給にてはい
みしくあはれとおもひながらもさらにやかて
うせにし物とおもひなしてをやみなんうつし
人になりてすゑの世にはきなるいつみの
ほとりはかりをゝのつからかたらひよるかせの
まきれもありなんわか物にとり返しみんの
心はつかはしなと思みたれて猶のたまはす
やあらんと思へと御けしきのゆかしけれは
大宮にさるへきついてつくり出てそけい
し給・あさましくてうしなひ侍ぬとおもふ給

78オ

へし人よにおちあふれてあるやうに人の
まねひ侍しかないかてかさる事は侍らんと思
たまゆれと心とおとろ〳〵しくもてはなる
ることは侍らすやとおもひわたりは侍る人のあ
りさまに侍れは人のかたり侍しやうにてはさ
るやうもや侍らんとにつかはしく思ふたまへら
るゝとていますこしきこえいて給ふ宮の
御ことをいとはつかしけにさすかにうらみたる
さまにはいひなし給はてかの事又さなんと
聞つけ給へらはかたくなにすき〳〵しくもおほ

78ウ

されぬへしさらにさてありともしらすかほ
にてすくし侍なんとけいしたまへは・そうつ
のかたりしにいと物をそろしかりしよのこと
にてみゝもとゝめさりしことにこそ宮はい
かてかきゝ給はんきこえんかたなかりける御
心のほとかなときけはましてきゝつけ給は
むこそいとくるしかるへけれかゝるすちにつ
けていとかろくうき物にのみ世にしられ
給ぬめれと心うくなんとのたまはす・いと

をもき御心なれはかならすしもうちとけ世
かたりにても人の忍ひてけいしけんこと
をもらさせ給はしなとおほす・すむらん山
さとはいつこにかあらんいかにしてさまあしから
すたつねよらんそうつにあひてこそはたし
かなるありさまもきゝあはせなとしてとも
かくもとふへかめれなとたゝこのことをおき
ふしおほす・月ことの八日〇はかならすたうとき
わさせさせ給へはやくしほとけによせたて
まつるにもてなし給へるたよりに中堂に
は時々まいり給けりそれよりやかてよ河に

79オ

おはせんとおほしてかのせうとのわらはなる
ゐておはすその人〳〵にはとみにしらせし
ありさまにそしたかはんとおほせとうち
みん夢の心ちにもあはれをもくはへんと
にやありけん・さすかにその人とは見つけな

79ウ

からあやしきさまにかたちことなる人の中に
てうきことをきゝつけたらんこそいみしかる
へけれとよろつにみちすからおほしみたれ
けるにや

80オ

注

（1）「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録　源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七巻二号（中京大学文学部　平成二五年三月）

（2）「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆　桐壺」『文学部紀要』第四八巻一号（中京大学文学部　平成二五年十月）

（3）「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆　帚木」『文学部紀要』第四八巻二号（中京大学文学部　平成二六年三月）

（4）「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆　空蟬　岡本主水筆　夕顔」『文学部紀要』第四九巻一号（中京大学文学部　平成二六年十月）

（5）注4に同じ。

（6）「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　若紫　石井了倶筆　末摘花　左馬助筆　花宴」『文学部紀要』第四九巻二号（中京大学文学部　平成二七年三月）

（7）「長谷川端蔵『源氏物語』東寺観智院筆　葵　岡本主水筆　賢木　北左平次行生筆　花散里」『文学部紀要』第五〇巻一号（中京大学文学部　平成二七年十月）

（8）「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆　須磨　岡本主水筆　明石　澪標」『文学部紀要』第五〇巻二号（中京大学文学部　平成二八年三月）

（9）注8に同じ。

（10）「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　橋姫」『文学部紀要』第五一巻一号（中京大学文学部）

（11）注6に同じ。

（12）「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　紅葉賀」『文学部紀要』第四六巻二号（中京大学文学部　平成二四年三月）

（13）「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　宿木」『文学部紀要』第四七巻一号（中京大学文学部　平成二四年十月）

（14）注6に同じ。

（15）注7に同じ。
（16）注7に同じ。
（17）注8に同じ。
（18）注4に同じ。
（19）注3に同じ。
（20）池田亀鑑氏編著『源氏物語大成』第二冊（中央公論社　昭和五九年一一月）
（21）財団法人日本古典文学会『尾州家河内本　源氏物語』第三巻
（22）池田和臣氏編『飯島本　源氏物語』第三巻（笠間書院　平成二一年二月）
（23）芳賀幸四郎氏『三条西実隆』人物叢書（吉川弘文館　昭和三五年四月）「四　大乱後の世相と和学への道」
（24）岸上慎二氏他編『日本大学蔵　源氏物語　三条西家証本』（八木書店　平成六年九月～八年五月）。「手習」に「以証本書写之老後之／手習無其益慚愧之／享禄辛卯正月廿日／逍遥老叟七十七歳／読合直付終了」とあり、「篝火」には、「享禄三八廿八書了九月十四了／五枚」と、実隆の奥書がある。
（25）古代学協会・古代学研究所編『大島本　源氏物語』第三巻（平成八年五月　角川書店）
（26）菅原郁子氏『正徹本の所在』『日本古典籍における「表記情報学」の基礎構築に関する研究』一号（国文学研究資料館　平成二四年三月）を参考。
（27）吉田幸一氏編『伏見天皇本影印　源氏物語四』古典文庫第五三九冊（古典文庫　平成三年十月）
（28）名古屋市蓬左文庫蔵『源氏物語　青表紙本』五四巻、系図一巻・極二通　五五冊。里村紹巴自筆奥書　紹九等寄合書。
（29）鶴見大学図書館蔵『源氏物語』五十四帖。鶴見大学図書館編『特定テーマ別蔵書目録集成三　源氏物語』（鶴見大学図書館　平成七年二月）によると、鶴見大本は寛永頃の書写で「賢木」に「天正十四丙戌年／縦紹巴法橋請講釈本也」という奥書がある。

(30) 山岸徳平氏・今井源衛氏監修『宮内庁書陵部蔵　青表紙本　源氏物語』（新典社　昭和四三年二月～四五年八月）。「桐壺」に「此物語五十四帖以青表／紙証本令書写校合銘是／当代宸翰也殊可謂珎奇／可秘蔵丶／権大納言藤実隆／（花押）」、「夢浮橋」に「此物語以青表紙／証本終全部之書／功者也／亞槐下拾遺小臣（花押）」と奥書がある。実隆が内大臣に任ぜられる永正三年（一五〇六）までに書写されているとわかる。

(31) 名古屋市蓬左文庫蔵『源氏物語　青表紙本』五四巻、目録二巻・極一巻　五六冊。「夢浮橋」に「此物語五十四帖相公羽林実世卿／借当時男女之手終一部之／書功須為万代不朽之家珎／而已／天文癸巳暦季夏下澣候／老比迫堯空書」と実隆の奥書がある。

(32) 今井卓爾氏他編『源氏物語の本文と受容』源氏物語講座八（平成四年一二月　勉誠社）池田利夫氏「源氏物語の諸本」

(33) 清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』（平成一五年三月　和泉書院）

(34) 吉田幸一氏『絵入本源氏物語考』上　日本書誌大系五三（青裳堂書店　昭和六二年一〇月）

(35) 注32と同書に「承応絵入版は、それ自体後刷りされたが、後には、絵までそっくり真似した万治三年（一六六〇）刊の横本」とあり、「承応絵入版」（承応本）を採用したので、この万治三年の絵入本は除外した。

(36) 伊井春樹氏編『萬水一露』二巻　源氏物語古注集成二五巻（平成元年二月　桜楓社）

(37) 工藤進思郎氏編『首書源氏物語　蓬生　関屋』（昭和六二年一〇月　和泉書院）

(38) 伊井春樹氏他編『源氏物語別本集成』四巻（平成三年一月　おうふう）

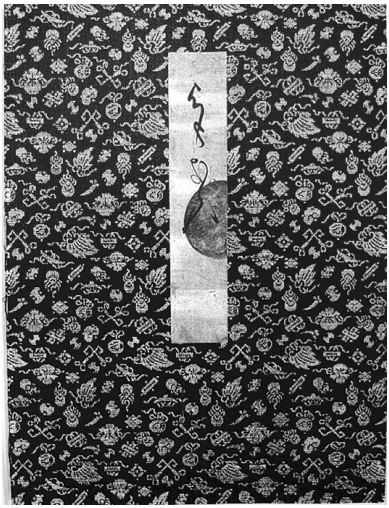
(39) 伊井春樹氏他編『源氏物語別本集成続』四巻（平成一九年六月　おうふう）

(40) 注33に同じ。

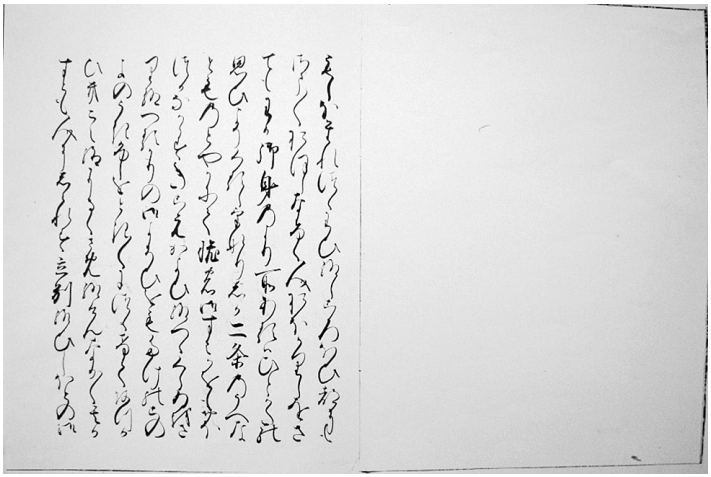
(41) 中村幸彦氏編著『策伝和尚送答控』未刊文芸資料第三期（古典文庫　昭和二九年一月）

(42) 注41に同じ。

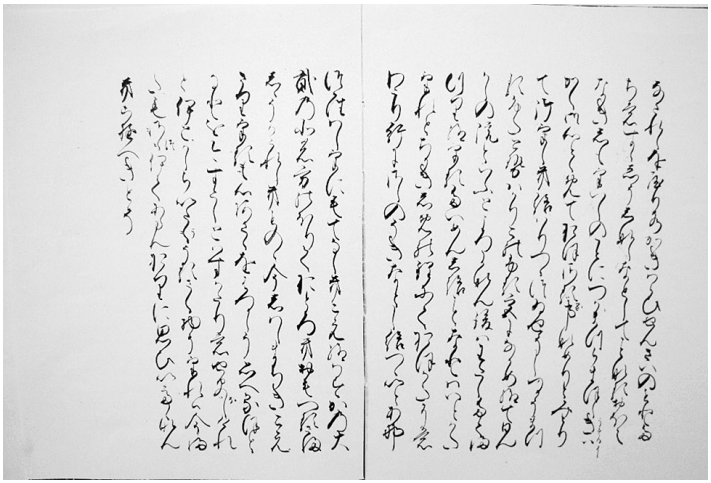
(43) 鈴木棠三氏『安楽庵策伝ノート』（東京堂出版　昭和四八年九月）



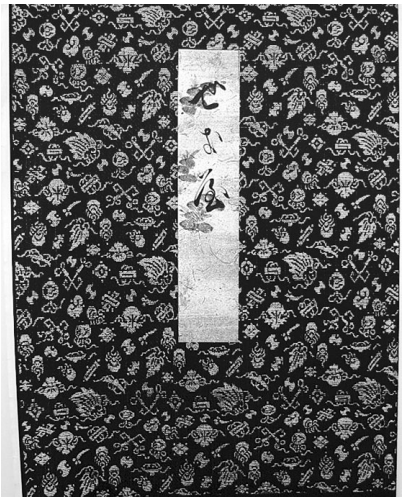
① 蓬生　表紙



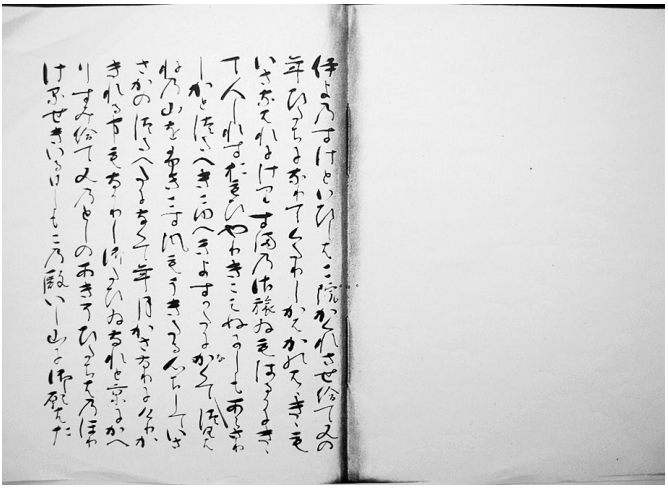
② 蓬生　１オ



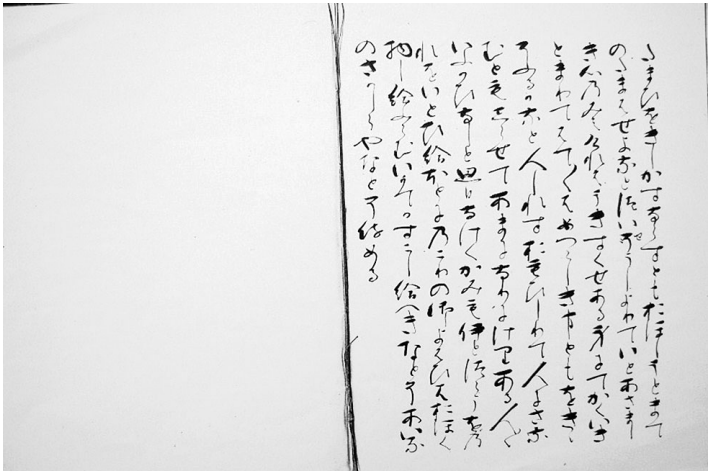
③　蓬生　終丁



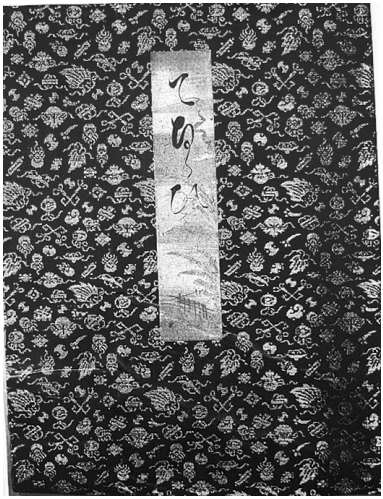
④　関屋　表紙



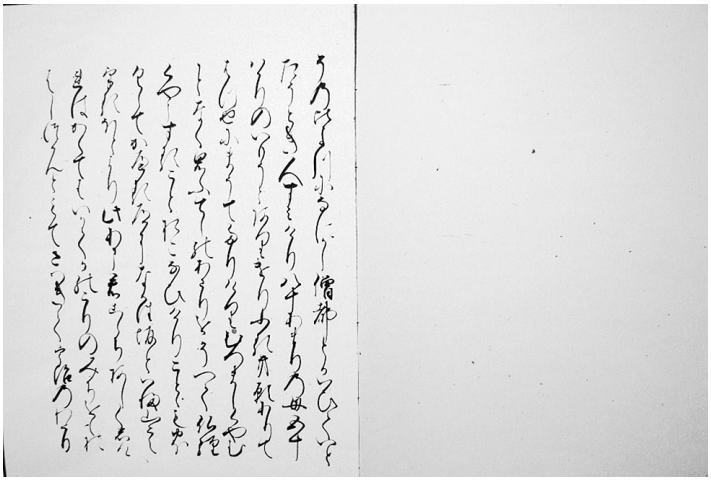
⑤　関屋　１オ



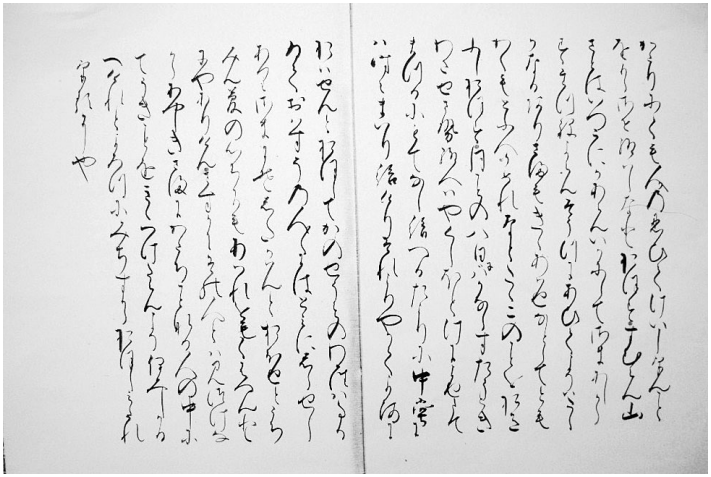
⑥　関屋　終丁



⑦　手習　表紙



⑧　手習　１オ



⑨　手習　終丁